外なる神とＩＳ

吼狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
外なる神とＩＳ

【Ｎコード】
Ｎ６９２３Ｚ

【作者名】
吼狼

【あらすじ】
それは現在か過去か未来か・・・その果てで戦い流れ着いた神がいた。
名も無き外なる神は赤城志熊（アカギシグマ）と名乗ってある世界にたどりついた。
その世界はＩＳ・・インフィニットストラトスというマルチフォームスーツが活躍する世界だった。
そのＩＳが活躍する世界にあるＩＳ学園、そこに織斑一夏とともに入学しなにを成すのか？

これはＩＳとオリ主のクロスです。
また、デモンベインやガンダムＡＣシリーズやスパロボＯＧから機体や言葉が出てきますのでご了承ください。
あとは少しクトゥルフ的なのも出ると思います。
それでもよろしければお楽しみください。
更新は不定期になると思います。

プロローグ（前書き）

始めまして、吼狼です。

書きたくなって書いてみました。

よろしければ呼んでみてください。

あと、処女作で手探りな感じになりますのでご了承ください。

プロローグ

それは戦っていた・・・・

とあるソンザイを眠らせるために・・・・・

全てを賭けて・・・・

「ちっ・・ナイアルラトホテプ！」

それはナイアルラトホテプと呼ばれる一柱の神に問いかけていた。

「くっ、まさかここまでとはね・・・わたしという化身のうちのどれかが起こした事とは言え・・面倒ね。でも、そろそろ来るはずだから・・・・・来た！！」

ナイアルラトホテプがそう言うと・・・

「ふぅ、やっとアザトースを眠らせるため事ができるか・・しかし・・・まさか協力者があいつらとはな・・・・」

「そうね、あなたにとっては同窓会かしらね？最も新しい外なる神？」

「そう・・だな・・あと、俺の名前を早く決めないとな。」

そう、その最も新しい外なる神は名前が無かった。
理由はこの外なる神は元は人間だったが、ある事故の後に名前を捨てたのだ。
だから、今のその神に名前がないのだ。
その人から神になった経緯はそのうちに語られるだろう・・・
「ふむ、まさかここまでの事態とはね」
その紳士の様に話す長い金髪にオールバックの彼は６対１２枚の翼を持つ魔王と呼ばれる存在、名をルシファーと言った
「こんな事になってるのかよ・・・早く止めないとまずいな。」
もう一人は黒い髪を肩くらいまで伸ばし、赤と青のオッドアイの男・・彼が最も新しき旧神と呼ばれる大十字九郎という。
「汝らが居ながらなんという体たらくだ！」
小柄だが、長い銀髪の少女の名はアル・アジフという。
「とは言っても他の化身のことまでわたし達は分からないよ？」
ナイアルラトホテプは少し不満そうに言うが・・・
「それをなんとするのが汝らの役目だろう！」
アル・アジフは怒鳴る、そこへ九郎とルシファーが

「少し、落ち着くといい、これでは勝てる戦いも勝てなくなるよ？」

「そうだぞ、アル、這い寄る混沌がちゃんと仕事できるわけないんだしな。」

アル・アジフはそれに渋々納得したのか

「まぁ、這い寄る混沌が使えないうえに迷惑なのは今に始まった事じゃないからな・・・」

「あれ？これって私泣いていいですか？」

と言いながらすでに泣いているナイアルラトホテプなのだが・・・

「漫才はそこまでにしとけ・・・来るぞ！！」

最も新しき外なる神が警告する。

それと同時に沸騰したような混沌としたナニカがこちらに迫ってきた。

「ちっ！」

全員がそれぞれ散らばる。

「奴らも呼ぶか・・・ハスター！！クトゥグア！！」

そう叫ぶと突然六亡星の魔方陣のようなものが浮かび上がり、そこから黄色の衣を羽織り仮面を付けた長身の人のような神と燃え滾る

猛悪な太陽のような神が姿を現した。

「主よ・・・なぜ奴がここにいる！！」

クトゥグアが叫んだ。

「仕方ないじゃないですか、そういう状況なのですから」

ナイアルラトホテプがそう言う。
実はナイアルラトホテプとクトゥグアは仲が悪いどころか天敵という関係である。
ちなみにハスターはクトゥルフと言う神と仲が悪かったりする。

「我慢しろ、それだけ切羽詰まってる状況なのだ・・・」

そう言ってなだめる？最も新しき外なる神に

「仕方ない、主の命令だからな・・・だが、いずれ消し去ってくれる！！」

クトゥグアそう言うと

「それは遠慮します。」

と微笑を浮かべるナイアルラトホテプであった。

ちなみにそんなやり取りをしているとハスターが、

「準備できたそうだ、作戦は単純に我らの最大火力を叩き込めばいいとの事だ。

ただし、九郎はシャイニングトラペゾヘドロンを直接使用するなとの事だ」

「了解、んじゃ、みんないっちょ行きますか！！」

「「「「「応！！」」」」」

まずは最も外なる神が

「インフィニティ・インパクト！！」

文字通り無限衝撃を相手に叩き込み相手を消滅させる技だ。

次にナイアルラトホテプが

「這い寄る混沌・・・」

自らの二つ名にもなっている技で能力は全てを侵食する（当然空間や概念すらも）

指向型術式である。

次はルシファーで

「原初の闇・・・そして・・・生み出せ！！無限熱量と無限零度！！」

これはルシファーの誇る最大級の技で結界内で無限熱量と無限零度を交互に発動させ相手を消滅させる技である。（つまりは熱膨張のすごいバージョン）

最後は大十字九郎とアル・アジフとそして翠色の髪をもつ機械神デモンベインによる。

「レムリアインパクト・アインソフオウル！！」

これはあらゆる世界から（あらゆるというのはそれこそ平行世界はおろか過去、そして未来や可能性の世界からも）召還し、その全てで無限熱量と無限重力を放つレムリアインパクトを叩き込む技だ。

それに呼応しハスターとクトゥググアが窮極の風と窮極の火を叩き込む

「・・・・・・・・」

いきなりアザトースの気配が変わった。

「眠った・・・か？」

ナイアラルトホテプがそう言った・・・だが・・・

「・・・！まだだ！！」

九郎が叫ぶ。

「これでは間に合わない！」

ルシファーでさえも焦る。

「これを使うしかないか・・・まぁ、力をそれなりに失うがそれでも皆消滅よりはマシだ。」

最も新しき外なる神の一言にナイアルラトホテプが

「そんな！！それは使ってはいけない技ですよ！！！」

「なら・・他に方法はあるか？」

外なる神の一言にうっと言って黙るナイアルラトホテプ

「やるか・・・皆は退避していてくれ。」

皆が頷くと退避を始めた。

「・・・・全ての滅びを従えし滅び！！」

その瞬間にナニカが起きたそれと同時に最も新しき外なる神は消えた・・・

「ここは・・・？」

最も新しき外なる神はそう言うと・・

「気がつきましたか？」

「ナイラルラトホテプか？」

「はい・・・その世界は地球がたどる世界の一つのようです。
今、情報とあるものを送ります。」

「あるもの？」

疑問に思う外なる神に・・

「はい、ＩＳと呼ばれる物です。
まぁ、いろいろ強化しすぎて可笑しな事になってますが・・・役には立つはずです。
それが今あなたのいる世界で盾として剣としてそして翼となります。
私達は今あなたの影響でその世界にこれ以上干渉できないのであとはよろしくお願いします。
まぁ、７０年もすれば力も元に戻るはずですから。」

ナイアルラトホテプからの念話？が切れた。

「・・・とりあえず、情報は・・・確かに平行宇宙のどのあたりとか宇宙の時間とか必要と言ってもそれ以外にもいろいろあるだろ・・・文化とか常識や歴史の情報が一切ないのは嫌がらせか？」

考えても仕方ないとばかりに動こうとすると

「そこのお前、何をやっている？ここはＩＳ学園の敷地内だぞ、どうやって入った？」

ＩＳ学園・・・そういえば奴が先程ＩＳがどうの言ってたな・・・まぁ詳しく知らなければ意味ないが・・・聞いてみるか

「すまないが、ＩＳ学園とはなんだ？」

と後ろを振り向くと黒い髪を腰のあたりで縛ったつり目の女がいた。スタイルは胸が大きくそれ以外は無駄な肉がないというモデル顔負けであった。（顔も美人である）服装はスーツでとても似合っていた。

「ＩＳ学園を知らない？ふざけているのか？」

その女性の反応に

「ふざけてなどいない・・・まぁ、事情を話しても構わないが荒唐無稽で信じられんぞ？」

最も新しき外なる神がそう言うと

「とりあえず、着いてこい・・・話はそれからだ。」

女性はそう言うと

「あぁ」

短く返事をした。

しばらく着いていくとある部屋に入った。
そこは一面が白に塗られた壁にパイプイスとテーブルという質素は部屋だった。

「さてまずは自己紹介だ・・私の名前は織斑千冬という、このＩＳ学園で教師をしている者だ。
早速だ貴様は何者だ？」

俺には名前がない・・・どうするか・・まぁ、真名は後に考えるとしてこの世界ではこう名乗るか・・・
神なった後から使い始めた偽名で・・・

「俺の名前は赤城志熊だ。」

千冬「赤城シグマだな。」

志熊「違う、カタカナではなく漢字で志熊だ。」

千冬「冗談だ、それでは質問を開始するいいな？」

志熊「あぁ、初めてくれ。」

千冬「ではお前は今までどこにいた？」

アザトースの庭なんて言っても仕方ないな・・・よし、多分あの町はあるだろう。

志熊「アメリカのアーカムって町に住んでいたが？」

千冬「アーカム？ちょっと待ってろ・・・・そんな町はないぞ？」

志熊「なに？あんなでかい町が無いだと？何かの間違いではないのか？」

千冬「正直に答えてくれ、お前はどこに住んでいた？」

志熊「アーカムだが？アーカムシティだ」

千冬「いい加減にしろ！！そんな町は存在しない！！！」

志熊「そう・・か」

千冬「どうした？」

志熊「これは荒唐無稽な仮説だが聞いてくれるか？いや、多分真実だろう・・・その証拠も見せてやる」

千冬「なんだと？言ってみろ」

志熊「それを話すにはまずは俺の身の上を話さなければならない、（もっとも、真実は話さんが・・・）お前は魔術師を信じるか？」

千冬「そんなものいるわけないだろ？」

志熊「俺はその魔術師だ、と言っても普通の魔術師ではなく外道の知識を使い外法を操り外道を狩る魔術師なわけだが・・・」

千冬「それで？」

志熊「俺はここに来るまでその魔術師を倒そうとしていたわけだが・・・倒したはいいがその時に敵の術でこちらに飛ばされたらしい」

千冬「馬鹿な」

志熊「なら、俺の魔術を見ればいい」

さて・・・どの術でいくか・・・やはりここはあれだな

志熊「旧神の鍵起動！」

そう言うと空間から一冊の本が出てくる。
ちなみに志熊は魔導書を何冊も持っている、ただしそれはオリジナルと瓜二つな写本であるが・・・（ちなみに改変とかが一切無いためオリジナルと同等の力がある）旧神の鍵は魔導書のなかでネクロノミコンを越えるといわれる魔導書である原本は石版でかの外なる神ウボ・サスラのいる場所に散らばってたとされるものである。

志熊「さて、使う術式は・・・暴餓龍！！」

暴餓龍（作者オリジナル魔術）
名前から連想される術とはちょっと違ってあらゆる種類の武具を創造できる。
本来は邪神や魔王を喰らい尽くすための滅神兵器であり、体内で眷属や武具を作り運用する空母にしてプラントのようなものである。
顕現すると地球クラスの惑星の文明など一瞬で滅ぶ。

志熊「さて、作るのは・・・ナイフでいいか・・・」

そう言うと一本の禍々しいナイフが現れた。

千冬「！！な・・んだ・・これは・・」

志熊「これで分かっただろう？触るなよ？魂が汚染されるぞ？」

千冬「なるほどな・・・」

志熊「それではこちらの質問だ・・この世界の歴史や情勢を教えれくれ、あとは常識もか・・」

千冬「あぁ・・まずはＩＳつまりはインフィニット・ストラトスというのだが知っているか？」

志熊「知らんな・・・」

千冬「篠乃之束博士が開発した宇宙空間用マルチフォームスーツだ、もっとも宇宙開発は頓挫してしまったが・・そして、１０年前に白騎士事件という事件が起きその際に２０００発以上のミサイルを全て迎撃し、さらにその白騎士確保に動いた軍を一人の死者を出さずに全滅させるという事件を起こし、その後ＩＳは戦闘機や戦車に変わり君臨することになった。
だが、ＩＳは女性にしか扱えないという欠点により女尊男卑の世の中となってしまった。
さらに篠乃乃博士は４６７個以上のＩＳのコアを作るのを拒否しており現在世界はその今あるコアだけでやりくりしているというのが現状だ。」

志熊「なるほど・・・（ふむ、まぁ機械神ほどは強くないだろう・・・脅威とはならんだろうが・・）

それで俺はどうなる？」

千冬「先程押収したものの中にＩＳがあった・・あれはお前のか？」

志熊「そう・・だな・・（ナイアルラトホテプが用意したやつだし多分俺のだろう）」

？「織斑先生？ちょっといいですか？」

緑色の髪に童顔で背が低いとどう見ても子供にしか見えない女性が入ってきた、胸は平均より上なのだがあとは眼鏡か・・・

千冬「どうした山田君？」

するとその山田と言う女性と目が合った。

山田「始めまして、山田真耶といいます。」

志熊「始めまして、赤城志熊だ、よろしく頼む。」

千冬「それでどうしたんだ？山田君？」

真耶「そうでした、赤城さんのＩＳなんですが・・・全然解析できなくて困ってたんです。」

千冬「ふむ、赤城は何か分かるか？」

志熊「多分、魔術のせいだろうな・・・無理に解析すれば良くて山田さんの発狂や死亡で悪ければこの周囲が汚染されてしまうだろうな。

もっとも、解析は出来ないだろうが・・・・」

千冬「そうか・・・なら、こうするしかないな・・・」

志熊「なんだ？」

千冬「いきなりだが、お前にはＩＳ学園に入ってもらう」

志熊「なるほどな・・・監視ってわけか」

千冬「それにＩＳ学園はあらゆる国家や企業に属さないとなっている、３年間身の振り方を考えるといい」

志熊「・・・まて、よく考えればＩＳ学園は女子高だよな？俺は一応男だぞ？」

千冬「それについては問題ない、もう一人男がＩＳ学園に入学するからな」

志熊「なに？どんな奴だ？」

千冬「織斑一夏、私の弟だ」

志熊「そうか・・・（この年で学園生活とは・・・）」

こうして最も新しき外なる神こと赤城志熊はＩＳ学園に入学することになった。

入学式（前書き）

早速書いてみました。

読んでみてください。

入学式

いきなりだが俺はそれなりに緊迫した状況下にある、もっともそれは隣の奴もそうなのであろうが・・・

真耶「全員揃ってますねー？それではＳＨＲ始めますよー」

返事は無いようだ。

俺はちなみにそれどころではない・・・クラスの女子の視線を俺たちに向かっているからだ。

真耶「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね。」

志熊「あぁ、こちらこそよろしく頼む。」

今のは話を流すために無意識のうちに出てしまった言葉のようだが・・・

真耶「はいっよろしくお願いします！」

山田先生には喜んでもらえたようだ、だからといってこちらの状況が好転するわけではないのだが・・・

真耶「じゃあ、自己紹介を出席番号順でお願いします。」

ちなみに俺はすでに意識を夢の世界に飛ばそうとしてる、いろいろ面倒になったからだ。

真耶「・・かぎくん？赤城君？」

志熊「どうした？何かあったか？」

真耶「あのね、今みんなで自己紹介してて今赤城君の番だから自己紹介して欲しいなって？ダメかな？」

志熊「あぁ、なるほどな、さてどうするか・・・」

真耶「嫌だった？嫌だったかな？」

声も沈んで泣きそうになる山田先生、こんなんで本当にいいのか？と少し思ったが・・・

志熊「赤城志熊だ、一応１９歳だが気にしないでくれ、敬語とかは無くて構わない。一年間よろしく頼む。」

女子から視線を浴びながら

志熊「以上だと言いたいが・・それでは納得しないだろう？だから・・そうだな２つまでまずは質問に答えよう。」

すると、ハイハイハイ！！と次々に手が上がる。

志熊「なら・・・そこの君」

女子Ａ「赤城の趣味はなんですか？」

志熊「ふむ・・・趣味ってほどではないが釣りをするぞ。あとはゲーセンで遊んだりもするな」

志熊「次は君にするか」

女子B「どんな女性が好みですか？」

志熊「・・・・わからん、すまんが俺は今まで諸事情により忙しくてそんな事考えてる暇が無かったからな・・・この3年間で分かれば御の字と言ったところか・・それでは以上だ、他に何かあれば俺に支障が出ない限りで聞きに来てくれて構わん」

そして、席に着く・・・あいつは大丈夫だろうか？見本をみせたが・・・

真耶「・・・君？織斑一夏君？」

一夏「は、はい！？」

声裏返ったな・・・まぁ、無理もないか・・・

真耶「あっ、あの、お、大声出しちゃってご、ごめんね。お、怒ってる？ゴメンね、ゴメンね！でも、あのね、自己紹介、“あ”から始まって今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

一夏「いや、あの、そんなに謝らなくても…っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

真耶「ほ、本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

一夏はそう言うと周りを見て。

一夏「織斑一夏です、よ、よろしくお願いします。」

すると深呼吸して

一夏「以上です。」

すると女子が何人かずっこけた。

おもしろいなと志熊は思いながら

（む・・この気配は）

するとパァン！といい音が鳴った。

織斑一夏の頭から・・・

一夏「げぇ！関羽！！」

パァン！ともう一度いい音が鳴った。

千冬「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

（関羽ね・・・女性に対してそれはないだろ・・・）

するとひゅっと志熊の頭に主席簿が来るが、パシっと受け止める。

志熊「俺がなにかしたか？」

千冬「今、変な事を考えたな？あとは教師には敬語を使え。」

（変なことだと？）

志熊「敬語については謝罪しますが、口にも出してない事で叩くのはおかしくないですか？証拠があるわけでもなしに」

千冬「顔でるからそれで読める。」

志熊「そうですか・・・つまりは顔に出てると勝手に判断してなにもないのに殴ると・・・ふざけるなよ・・・貴様みたいな奴に尽くす礼などあると思うな。」

一瞬殺気みたいなものが放たれる、それも千冬だけが感じ取れるように

千冬「す、すまなかった・・・」

千冬は怯み謝罪をすると、いきなりぽふんと頭に手を置かれ頭を撫でられた。

志熊「よく謝ったな、もういいぞ、あとすまなかったな？俺も大人気ない事して」

千冬「あ、あう／／／」

教室でしかも皆がいる前で頭を撫でられるという羞恥プレイ？の前に顔を赤くするしかないのだった。

志熊「っと、すみませんした。」

そう言って頭から手を離す。

千冬「いや、気にするな／／／」

（気持ちよかった・・・）

そんなことを思う千冬だった。

千冬「っと、そうだ山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

真耶「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと……」

笑顔で答えた。

千冬「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

ん？なんか矛盾してないか？まぁ、いいなどと思ってると・・・

「キャーーーーーーーーー！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に会うために北九州から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「千冬様・・ハァハァ・・・イイ！！」

・・・一番下・・・何がいいんだ？

千冬「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。まさか、私のところに集めているではいのだろうな？」

千冬は本当に鬱陶しいんだろうな・・・気持ちは分かるが・・・一応は人望だ大切にするがいいさ。

千冬「挨拶も満足にできんのか、お前は」

一夏「いや、千冬姉、俺は・・」スパンッ！！

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「…はい、織斑先生」

千冬「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」

そして自己紹介は終わった、そして。

千冬　「ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

ハーイといい返事が聞こえてくる、ここでだが断るとか言ってくれる奴とかいればおもしろいのだが・・・いるわけないか・・・無論俺はそんなことは言わない、教わる立場だしな。

そして一時限目が終わり、休み時間

一夏「改めて始めまして、俺は織斑一夏と言います。」

志熊「こちらこそ、俺は赤城志熊だ、年上だが敬語とかはいらんからな。」

一夏「そっか、わかった、それじゃよろしくな」

志熊「あぁ、せっかくの男友達だからな、仲良くしよう」

一夏「にしてもまさか千冬姉の頭撫でるとかすごいな」

志熊「あれは癖みたいなものでな・・・」

一夏「もしかしたら殴られてたかもしれないぜ?」

志熊「その時はその時だ」

その時

?「ちょっといいか?」

確か篠乃之箒だったか・・・

「「なんだ?」」

箒「あぁ、そこの・・・」

志熊「織斑か?」

一夏「一夏でいいぜ」

志熊「なら俺も志熊と呼んでくれ」

箒「でだ」

志熊「あぁ、行ってこい一夏」

一夏「んじゃ、ちょっと行ってくる」

さて、俺はこれからどうするかな・・・見世物パンダは気に入らんが波風たてるのもな・・・寝るか・・・

そして・・・2時限目の途中・・・

真耶「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

一夏「あ、えっと…」

真耶「わからないところがあったあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

胸張って言ってるな・・・格好いいとこ見せたいのか？むしろ可愛いな・・・一般感性からすれば・・俺には・・・わからん

一夏「先生！」

真耶「はい、織斑くん！」

一夏「ほとんど全部わかりません」

なるほどな、だからか先程から苦しんでたのか・・・

真耶「え…。ぜ、全部、ですか…？他にここまでまったく分からない人はいますか？」

一夏が俺のほうを向くが・・・もともと神なんてやっているのだ・・・それも凶悪にして猛悪な邪神を

もっとも、それは人間などの知的生命体や精神生命体の尺度の話なわけだが・・・とにかく、このようなことは1秒と掛からずにマスターした。

多分、知識と理解ならここの生徒でも相当（ちょっと専門機関に行けばそれだけでＩＳ学園の教師を超えるだろう）俺は分かってると返した、そしたら一夏ががっくりした。

千冬「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

一夏「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパンッ！といい音がした。

千冬「織斑、必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

一夏「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと…」

千冬「やれと言っている」

一夏「…はい。やります」

まぁ、自業自得か・・・後で教えてやるか・・・甘いな・・俺も・・・

そして2時限目がおわり休み時間

？「ちょっとよろしくて？」

ちなみに今は俺が一夏に勉強を教えてる、ちなみに俺の教え方は絵を使用したり噛み砕いて説明するあとは身近にあるもので説明できそうならそういうのも活用する。

問題は中々に熱中してるせいか周りの声が聞こえないのだが・・・・

もう一度金髪の子が

？「ちょっとよろしくて？」

やはり反応はない・・・そして・・・・

バン！！と机を叩いてから

？「無視しないでいただけるかしら！？」

志熊「すまんな、確か・・・セシリア・オルコットだったか？」

セシリア「そうです、セシリア・オルコットです。」

一夏「で？何か用か？」

セシリア「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけら

れるだけでも光栄なのに、なんなんですその態度？」

志熊「ほう？どういう事だ？」

セシリア「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

そこで一夏が・・・

一夏「あ、質問いいか？」

セシリア「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生ってなに？」

また、周りがずっこけた・・・おもしろいな・・・

志熊「代表候補生というのはその名の通り未来の国家代表になる候補生のことだ、つまりはエリートだな」

一夏「なるほど」

志熊「いいか？言っておくが基本的に自分で調べて理解しろ、だがそれでも分からなかったら俺らを頼れ、知らない事は恥ではない・・・知ろうとしない事が恥だ。」

一夏「わかった。」

志熊「いいぞ、オルコット」

セシリア「んん、では・・そう！エリートなのですわ！」

格好つけながら言うセシリアに俺はあきれるが

セシリア「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じなだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

一夏・志熊「「そうか。それはラッキーだ」」

セシリア「…あなたたち、馬鹿にしていますの？」

一夏「お前が幸運だって言ったんじゃないか・・・」

志熊「・・・面倒な奴だ・・・」

セシリア「まったくあなた達は男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい期待していたのに、まったくもって期待はずれですわね」

一夏「俺に期待されても困るんだが」

志熊「そうか・・・」

すでに半分聞いてない志熊

セシリア　「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

志熊「それは助かるな、早速だがいち・・・」

セシリア　「ＩＳのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

・・・こいつを利用するのは止めるか・・・

一夏「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」

志熊「すごいな、一夏」

セシリア「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

驚いてるセシリアに

一夏「女子だけではっておちじゃないのか？」

（オルコットの精神に亀裂が入った。）

一夏の追撃の一言であった。

セシリア「あなたが教官を倒したって言うの！？」

一夏「うん、まあ。たぶん」

志熊「多分だと？」

一夏「いや～、だから、たぶん倒した」

セシリア「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

一夏「落ち着け？な？」

セシリア「これが落ち着いていられますか！」

それと同時に3時限目のチャイムがなった。

セシリア「っ…！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

志熊「これは・・・面倒な事に・・なった・・・」

一夏も同じような台詞を言った。

3時限目の授業

この時間は千冬が教壇に立っている、ちなみに真耶は教室の後ろのほうでメモを取る準備をしていた。

千冬「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明すると、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬が言う。

千冬「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな」

面倒そうだな・・・まぁ、黙っとけばいいか・・・

女子A「はいっ。織斑くんを推薦します！」

女子B「赤城さんを推薦します。」

千冬「では候補者は織斑一夏と赤城志熊…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

一夏「お、俺！？」

まぁ、そういう反応するな、こいつは。

千冬「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？」

一夏「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」

千冬「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無い」

志熊「まぁ、諦めろ・・・この先生に何を言っても無駄だ」

千冬「他にはいないか？いないならこの二人の中から選ぶぞ」

む、他に誰かいないものか・・・すると、セシリアが机をバンッと机をたたき立ち上がる

セシリア「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？

実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

猿か・・・その猿に振り回されてる世界はなんなのだろうな？

セシリア「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で―」

一夏「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

セシリア「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

志熊「二人とも少し落ち着け、それにオルコットが最初に日本を侮辱しなければお前の国も侮辱されなかったのだぞ？」

セシリア「決闘ですわ！」

口論での旗色が悪くなったから決闘か・・・子供らしくていいな、あ・・俺も巻き込まれてるのか・・・などと思ってると

一夏「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

セシリア「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

セシリア「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

（元気いいなこいつら・・・さて・・・寝ながら授業受けるか・・・）

一夏「ハンデはどのぐらいつける？」

セシリア「あら、早速お願いかしら？」

一夏「いや、俺がどのぐらいハンデをつけたらいいのかなーと」

すると教室に爆笑が巻き起こる。

少女Ａ「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

少女Ｂ「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

少女Ｃ「織斑くんたちは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

少女Ｄ「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言われてるんだよ」

その反応に俺は少し灸を据えるために怒気を少し入れて

志熊「本当にそう思っているのか？だとしたら貴様らは本当にめでたい精神をしているのだな。」

少女E「どういうこと？」

志熊「いいか？戦争というのはそんな簡単に勝ち負けが決まるわけではない。
確かにISは優秀な兵器だろう・・・だが、戦争は正面から堂々と戦うわけではない。
暗殺や誘拐といった事から経済制裁や資源の供給ストップなどいくらでも方法はある。
例えば、お前はもしも男と女が戦争したとして家族や大切な人が人質になったらどうする？」

少女A「それは・・・」

志熊「それに僅か467機しかISは無い、それしか無いのに戦争をカバーできるわけないだろ？少し考えれば分かる事だ。
それに、ISに対する戦術も戦争中にできるだろうしな。
それらを考察して男が女に戦争をして負ける道理は無いという事だ。
あと、ISはアラスカ条約があるとしても根本は兵器だ、勘違いするな。
そして、それを覚悟しろとは言わない・・・頭の隅にでも置いとけ、以上だ」

千冬「赤城の言う通りISは兵器だそれだけは覚えておけ、では来週の月曜日に放課後第三アリーナでクラス代表の件は行う。赤城、織斑、オルコットは準備しておけ。では、授業を始める。」

こうして授業は進んでいった。

入学式（後書き）

読んでくれて有難うございます。

長すぎたりしてないでしょうか？

それでは今日は失礼します。

異界からの王と事故（前書き）

今回はオリジネルストーリーが混ざります。

それでは始まります。

異界からの王と事故

今は昼休みである。

箒「私はあの人とは関係ない！！」

篠乃之が大声を出し教室の空気が一瞬悪くなるという事以外はたいした事もなかった。

ちなみに篠乃之箒は篠乃之束の妹である。

（あの姉妹は仲が悪いのか？まぁ、俺がどうこうする問題ではないが・・・）

志熊「一夏、飯を食いに行かないか？」

一夏「あぁ、そうだ！箒も誘っていいか？」

志熊「構わんぞ？」

一夏「サンキュー」

一夏は篠乃之を誘いに行ったが気づいたら投げられていた・・・・

志熊「ほう・・投げ方としては悪くないな。」

その後学食にて・・・

一夏「なぁ、箒、お前がＩＳについて教えてくれよ」

箒「わ、私がか！？」

一夏「千冬姉に教わってもいいんだけど千冬姉ぇは忙しいだろうし身内びいきって思われても困るしな」

志熊「篠乃之、いいのではないか？教えるのもまた勉強になるしな。」

箒「し、しかし・・・」

すると一人の女子が話しかけてきた

女子「ちょっといいかな？」

その女子はリボンの色が違っていた。
つまりは上級生である。

女子「君達がうわさの男子生徒君達でしょ？イギリスの代表候補生と試合することになったっていう」

一夏「えぇ、そうですけど？」

女子「君達ってＩＳの機動時間ってどのくらい？」

一夏「多分、３０分くらいかと・・・」

志熊「俺は１時間くらいか（実際は０分だな・・・俺のＩＳは待機形態からずっとこのままだしな・・・反応はあるが動かないと・・・）」

女子「それじゃあ代表候補生には勝てないよ。代表候補生は機動時間3桁はいってるから。ねぇ、よかったら私がＩＳについて教えてあげよっか？」

一夏「助かります。それじゃあ・・」

箒「結構です。私が教えることになっていますから」

女子「でも、あなたも1年生でしょ？そしたら上級生の私が教えたほうがいいんじゃない？」

箒「私は！篠ノ之束の妹ですから」

女子「っ！？そう・・それなら大丈夫ね」

するとその女子は去っていった。

一夏「箒お前が教えてくれるのか？あんまり乗り気じゃないみたいだったけど・・・」

箒「うるさい！・・・それより剣道の腕がなまってないか確かめてやる。放課後剣道場に来い」

一夏「いや、俺はＩＳの事を教えてほしいんだけど・・・」

志熊「いや、案外いいのではないか？ＩＳの動きは操縦者の動きがダイレクトに伝わるからな」

一夏「わかったよ」

志熊「まぁ、知識は俺がなんとかしてみる」

一夏「頼む」

そして放課後・・・・

箒「・・・どういうことだ？」

一夏「どういうことっていわれても・・・」

箒「なぜ！どうしてここまで弱くなっている！？」

志熊「箒（食堂で箒と呼んでくれと言われた。）責めるのは構わんが・・・一夏をここで潰すなよ？」

その後箒に散々に扱かれた一夏であった。

帰り道にて志熊と一夏は山田真耶の呼び止められていた。

真耶「織斑君、赤城君、ちょっといいですか？」

一夏・志熊「「なんですか？」」

真耶「貴方たちの部屋割りが決まったので伝えにきました。」

一夏「え？でも、俺は一週間は自宅から通学のはずでは？」

志熊「誘拐とかの対処だろう。（俺はあの部屋でも構わないが・・・）」

ちなみに志熊が今までいた部屋は所謂取り調べ用の部屋である。

一夏「でも、荷物とか取りに行かないと」

千冬「安心しろ、それは私がやっておいた。
服と携帯の充電器と小物があれば十分だろう。」

一夏「・・・ありがとうございます・・・」

娯楽が一つも無いのが不満な一夏であった。

志熊「っ！！？・・・・悪いが、一夏は先に帰ってくれ。
俺は忘れ物をした。」

一夏「わかった。」

真耶「それでは寄り道しないで下さいね？」

ちなみに学校から寮まで５０メートルくらいだ寄り道するところなど無い。

そして校舎に戻った志熊は

志熊「出て来い・・・すでに分かっている。」

？「そうか、流石はルシファーの友だ。」

志熊「貴様は誰だ？」

？「我が名はアンリ・マンユだ。ルシファーが治める魔界とは別の魔界を統治している。」

志熊「ほう？それでそのアンリ・マンユがなんの用だ？」

アンリ「なに、貴様の力が知りたくてな・・・ゆくぞ！！」

言い終わると同時にアンリ・マンユは地面から無数の紫色の氷柱を生やした。

それは志熊に当たる前に全てかき消された。

そう、志熊の術によって。

志熊「イマジンキャンセラー・・・所謂魔術等に対するカウンタースペルだな。
次は俺の番だ・・・暴餓龍・・・創造・・・神喰の槍！！」

そう言うと志熊の手に禍々しい黒に赤いスジが入った西洋風の槍が現れた。（モデルはクロスボーンガンダムＸ２のショットランサー）

志熊「ふっ！」

常人では見る事が出来ない速度で突撃を仕掛ける志熊、速度は軽く超音速の領域だろう・・・衝撃波は魔術で消し去っているので影響はない。

アンリ「なるほど・・・確かに弱体化したな・・・だが、この世界で過ごすには十分すぎるな。」

槍とアンリ・マンユの爪が何度も交差する。
秒間で１００回以上の交差をするほどの戦闘が一時間半ほど続いた時に。
志熊「槍よ・・・敵を穿て！！」
槍が甲高い音を出しながら回転する。
そして、今までで一番早い速度で突貫する志熊・・・それはアンリ・マンユを貫きそして・・・ただいま絶賛入浴中の大浴場に突っ込む事になった・・・・
バガーン！！！
志熊「奴は分霊だったか・・・まぁ、倒せたのだからよしとするか・・・」
？「ほう？何がよしなんだ？」
志熊「む？・・・・あぁ、なるほどな、奴の策に嵌ったか？」
するとキャーーーーーーーーー！！！！！
と女子の声が聞こえた。
志熊「すまんな、千冬先生、壁を壊してしまった。」
千冬「それよりも・・・さっさと出てけ！！」

ゴスッ！と志熊の鳩尾に拳が当たった・・・もっとも、身体の強化のせいで志熊にダメージは一切無いのだが・・・

そして、部屋に着くと・・・

志熊「なかなかの部屋だな、監視カメラや盗聴器もないな。」

志熊は一人部屋で一夏と箒の隣である。

志熊「そういえば、先程隣の部屋のドアを見たら穴だらけだったな。」

コンコン・・・

志熊「誰だ？」

ガチャ・・

千冬「ちょっといいか？」

志熊「あぁ・・」

千冬「先程の事だが・・・何があった？」

志熊「力試し？ってところか・・・”こちら側”の事だから干渉しないほうがいい」

千冬「・・・だが、壁の件はそうもいかんぞ？」

志熊「それは後で直しておく」

千冬「どうやってだ？」

志熊「魔術でだ」

千冬「見てもいいか？」

志熊「・・・（まぁ、あの魔術くらいなら問題ないか・・・）いいぞ」

千冬「では、後でな」

バタン・・・

志熊「さて、少し調べるとするか・・・オルコットの事でも・・・な」

しばらくして・・・ジャージ姿の千冬とともに壊れた壁のところへ来ていた。

普通に考えれば超音速で突っ込んできたら壁が壊れるどころではないが、アンリ・マンユのせいで威力が減殺されあの程度の被害で済んだのだった。

千冬「それで、どうやるんだ？」

志熊「簡単だ・・・時よ巻き戻れ・・・」

まるで逆再生するかのように壁に破片がはめられて元に戻っていく。

千冬「・・・すごいな」

志熊「まぁ、時間関係は基本的に難しいからな（人間から見ればだが）」

千冬「他にも直せたりできるか？」

志熊「便利屋にはならないぞ？」

千冬「別にいいだろ？風呂に入ってきたのだしな」

志熊「１回だけだ・・・」

千冬「あぁ、分かった」

こうして夜は過ぎていった・・・

次の日に一夏に専用ＩＳが来るという情報が来た。

一夏「俺専用ＩＳかぁ・・どんなのかな？」

千冬「さぁな、私のところには情報は無いからなんとも言えんな」

箒「とりあえず剣道場に行くぞ！」

志熊「行って来い」

千冬「お前は行かないのか？」

志熊「俺は俺のＩＳの事で手一杯なんでな」

千冬「動かなければ訓練機でやるしかないな」

志熊「そう・・だな（訓練機はラファールが使えればいいが）」

そしてすぐに決闘の日が来た。

異界からの王と事故（後書き）

今回はちょっと短いですかね？

長さは気分で変わりますのでご了承ください。

蒼い涙と白と外なる神と（前書き）

セシリア対志熊です。

戦闘が下手ですがよろしくお願いします。

蒼い涙と白と外なる神と

クラス代表決定戦当日

志熊「さて、これからどうするか・・・ん？あいつらはどうしたんだ？」

一夏「なあ、箒」

箒「なんだ、一夏」

一夏「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

箒が目を逸らした。

一夏「目　を　そ　ら　す　な」

志熊「まぁ、一応は知識は入れただろ？」

一夏「そうだけどさ・・・」

そう、志熊は一夏にあの分厚い教本の内容を一夏の頭に入れたのだ。

志熊「それに、剣道の稽古ももしかしたら役に立つかもしれんぞ？」

箒「そうだぞ！一夏」

一夏「分かったよ」

箒「にしても一夏のＩＳはいつ来るのだ？」

一夏「さぁ？」

志熊「仕方ない、俺が先に行くか」

一夏「ん？志熊ってＩＳあったっけ？」

志熊「あぁ、もっともちゃんと動くか心配だけどな・・・」

一夏「おいおい、大丈夫か」

志熊「まぁ、なんとかする・・それでは行ってくる」

一夏「あぁ、買ってこい！」

志熊「（ＩＳ・・・起動・・・）・・起動したか・・・」

志熊のＩＳははっきり言って異様であった・・・先程からのた打ち回りながら志熊の肩の横で浮いてる黒い物体があるだけである。

志熊「赤城志熊・・・出るぞ！」

カタパルトには乗れないので浮いてそのままアリーナへ向かう。

セシリア「あら？逃げずに来ましたのね？それにしてもなんですか？そのＩＳは？」

志熊「まぁ、実験機だからな・・・」

セシリア「まぁ、いいですわ、それよりも・・わたくしが勝つのは自明の理ですわ。
ですから、今ここで泣いて謝れば許してさしあげますわ」

志熊「・・・・」

セシリア「聞いてますの？」

志熊「・・・・」

セシリア「無視とはいい度胸ですわね・・・潰してさしあげますわ」

そうセシリアが言うと試合開始のブザーが鳴った。

まずはセシリアのＩＳブルー・ティアーズが持つレーザーライフルスターライトＭＫ－？を放ってくる、
それをギリギリで回避する志熊である。

志熊「ちっ・・・思った以上に性能が低いな・・こいつは・・しかも俺とこいつで動きの齟齬がある」

セシリア「どうしましたか？あなたの実力はその程度ですか？」

志熊「とりあえずは武器なり盾なりないとな・・・武器も盾も無いだと？」

ブルー・ティアーズから放たれるレーザーを回避しながら考える。

（武器も無く機体性能も量産機を遥かに下回る・・・か・・・第一世代にも勝てない性能だな）

セシリア「避けるのは上手いみたいですね、これではどうですか？さぁ、踊りなさい！セシリア・オルコットとブルーティアーズが奏でる円舞曲を！！」

するとブルーティアーズのリアスカートから４基のビットが放たれた。

志熊「くっ！」

避けきれずに少しづつ被弾する志熊の機体

（あいつは常に死角を攻撃するように配置しているな・・・それに、多分だが・・・誘導してみるか・・・）

志熊「そのビット操ってるときは自身は攻撃できないのだな？」

セシリア「よくわかりましたわね？」

志熊「ビット動かしてる最中にお前からの攻撃がないからな。嫌でも分かる」

セシリア「ですが分かったところで攻略できなければ意味ありませんわ！」

志熊「今だ・・・」

志熊がそう言うとブルー・ティアーズのビットを踏み台にして一気に接近した。

セシリア「残念、ブルーティアーズは六基ありましてよ！」

志熊「それも予測済みっ！なんだと・・・」

志熊の動きに志熊のＩＳがついてこなかったのだ。

ズゴーン！！！ミサイルが直撃したのか煙で前が見えない・・・

千冬「ふむ、機体に救われたようだな・・・」

煙の中から現れたのはデモンベインの大十字九郎の魔術師（マギウス）スタイルのような服装に包まれた志熊の姿があった。

志熊「やっと一次移行したか・・・」

セシリア「まさか初期状態で戦っていましたの？」

志熊「あぁ、しかも武器なしでな」

セシリア「なんですって？」

志熊「まぁ、安心しろ・・もうそれも解消されたからな・・・あと、このＩＳの名前も今分かったから教えてやる。こいつの名前は・・・ネームレス・アバターだ」

セシリア「ネームレス・アバター・・・名も無き化身？」

志熊「名も無き化身・・だからなににでもなれる・・・アバターシステム起動・・・他世界、平行世界情報取得・・・使用気体決定！ＺＧＭＦ－Ｘ６６６Ｓレジェンド・ガンダム！！」

志熊がそう言うと灰色と青と赤のトリコロールカラーの機体が現れた。

背中には円形の何かを半分に割ったようなユニットに姿勢制御用の羽みたいなものがついていた。

志熊「さて・・・これはお前の土俵の機体だ、この世界でいうＢＴ兵器を搭載している。」

セシリア「ですが、ＢＴ兵器に関してはこちらに一日の長がありましてよ！」

志熊「そうだな、だが、俺はすでにこの機体を全てしている・・ドラグーン！」

そう志熊が言うと背中の六基の羽みたいなビットと2基の円錐状のビット、さらに腰のビットを飛ばした。

ちなみに羽みたいなドラグーンと呼ばれるビットは一基につき砲門は2門あり数は八基ある。

円錐状のドラグーンは九門の砲門があり2基存在する。

さらにビームライフルを装備しているので合計で３５の砲門に狙われるのである。

さらにブルー・ティアーズとは違いレジェンドはドラグーンをコントロールしながら自機も操作できるのである。

さて、そんな機体の前にセシリアは驚愕するしかなかった。

志熊「ビームの出力はＩＳ用に設定してあるのか、まぁ、普通に使ったらセシリア死ぬからな。」

そう、志熊の使う化身機体は基本的に武器の威力が高すぎるために出力を相当落としているのだ。

普通の出力で撃つと絶対防御を易々と貫くのだ。

志熊「ではいくぞ」

セシリア「っ！？」

志熊の合図を切欠に全てのドラグーンが立体的にそして縦横無尽にビームの雨を降らす。

セシリア「あああああっ！！」

セシリア避けようとするが努力むなしく次々と被弾しシールドエネルギーを削っていった。

志熊「これで終わりだ」

そう言うと上下両方にビーム刃がでるビームサーベルと出し突貫する。

セシリア「なっ！？はやっ！！」

レジェンドがブルーティアーズと一閃するとブルー・ティアーズの

シールドエネルギーが0になった。

セシリア「あ、落ちる・・・助けて・・・」

落下するセシリアを志熊が受け止める。

いるまでたっても地面に激突しないので恐る恐る目を開けると

志熊「起きたか？」

セシリア「え？あ・・わたくしは・・？」

所謂お姫様抱っこの状態にセシリアは

セシリア「あ、あ、」

志熊「どうした？どこか痛いのか？」

セシリア「いえ・・・大丈夫です・・・／／／」

志熊「そうか・・・一応俺が一番の年長者だから言っておく、これ以上自分を裏切る行為をするな。」

セシリア「え？」

志熊「お前が今の地位を掴むために相当努力したのだろう、それは認める。
だが、あのような発言や態度は今の地位を脅かす行動だ、それはここまで築き上げてきた努力を無駄にする。
だから、そのような行為はするな。」

セシリア「はい」

志熊「分かればいい」

そう言ってセシリアの頭を撫でる志熊

セシリア「（あ、気持ちいいですわ／／／）」

そしてピットに着くと頭を撫でる手を下ろす。

セシリア「あ・・」

志熊「ん？どうかしたか？」

セシリア「いえ、なんでもありませんわ」

志熊「そうか」

次は一夏対セシリアであったが一夏が敗退した。

そして最後の戦いは志熊対一夏だ。

一夏「最後は志熊とか」

志熊「悔いだけは残すなよ？」

一夏「そっちこそな、そういえばあのレジェンドってので戦うのか？」

志熊「いや、今回はお前の土俵で戦ってみようと思う」

一夏「俺の土俵？」

志熊「あぁ、見てろ・・・システム起動・・・工程省略・・・使用機体・・ＯＺ－１３ＭＳガンダムエピオン！！」

一夏「なっ！さっきと違う機体なのか？」

志熊「あぁ、こいつはガンダムエピオンと言って射撃武器が一切ない格闘戦専用の機体だ。」

一夏「すげぇな・・・」

ガンダムエピオンは紅と黒と白のトリコロールカラーで胸に緑色の玉が付いている。

背中には翼を彷彿とさせるスラスターが付いている。

志熊「いくぞ」

一夏「来い！！」

それと同時に突進するエピオン。

一夏「っ！？」

一夏はまったく反応できなかった、そしてモニタールームでは

千冬「なんだ・・・あれは・・・カメラの解像処理が間に合わない

だと!?先程の機体といい今の機体といい・・・化け物か・・?」

箒「圧倒的すぎる・・・」

真耶「あれは一体なんなのでしょうかね?」

千冬「後で奴から聞かせてもらうとするか」

一夏「一体何をしたんだ?」

志熊「あぁこれだ」

一夏「なんだそれ?」

志熊「ヒートロッドと言って熱で相手の装甲を切る蛇腹剣と鞭の中間みたいな武器だ。これはエピオンのシールドに内臓されている」

一夏「なるほどな・・・」

志熊はエピオンで約マッハ5．5つまりは極超音速で切り抜けたのだ。

一夏「なら、次はこっちの番だ!!」

そう言うと一夏の白式が突っ込んでくる

志熊「甘い、単純に突っ込めばいいというものじゃない」

一夏「なら、これでどうだ!」

志熊「それも読める」

一夏「くっ！まだまだぁぁぁ！！」

志熊「そうだ、諦めるな、来い！」

一夏「うおおおお！！」

真耶「はぁ～すごいですね、二人とも」

千冬「いや、あれは志熊か一夏に訓練をつけてるだけだ」

それから数十分後・・・

千冬「そろそろ決着をつけろ」

アリーナに千冬の声が流れる。

志熊「そうか、ならば名残惜しいがこれで終わりにする。」

一夏「なら俺も・・・零落白夜発動！！」

すると雪平弐型の刀身が割れ中からエネルギー刃が出る。

そして志熊のエピオンもまた大出力ビームソードを取り出す。

そして双方の光の刃がぶつかる。

一夏「嘘だろ？零落白夜が押されてるだと？」

志熊「エピオンのビームソードは威力が高すぎてＩＳなど絶対防御を豆腐のように切ってしまうほどだ。
だから、出力を落としたのだがそれでも危ないからビーム刃の安定維持能力に回したのさ。
それでも零落白夜よりも性能は上なのだがな。」

一夏「・・・ぐぅ・・そうかよ・・・」

志熊「はあ！！」

志熊が力を込めると零落白夜が切り裂かれ白式も同じように切り裂かれた。

試合終了後・・・

千冬「ちょっといいか」

志熊「あぁ、いいですよ」

更衣室のドアを開けるとそこには半裸の志熊がいた。

その身体は筋肉質でありながら嫌味のない体をしていた。

千冬「おい、ちゃんと着替えてからいいと言え」

志熊「？あぁ、分かりました」

志熊は分かっていないようだった。

志熊「それで、一体なんの用ですか？まぁ、俺のＩＳの事だとは思いますが・・・」

千冬「その通りだ・・ネームレス・アバター、あれは一体なんなんだ？」

志熊「あれは普通のＩＳではありません」

千冬「それは分かってる」

志熊「あれのワンオフ・アビリティーはアバターシステム」

千冬「アバターシステム？」

志熊「えぇ、俺のＩＳはあらゆる世界、つまりは他の次元の世界や平行世界、さらには過去・現在・未来から情報を汲み取ってそのオリジナルに限りなく近い性能の機体になる能力です。ただ、今は制限があるのかある一定以上の性能の機体は無理なのですが。」

千冬「・・・なんというか・・・出鱈目なＩＳだな・・・」

志熊「そうですね」

千冬「もしかするとお前を取り合って戦争が起こるかもしれんな」

志熊「まぁ、その時はその時ですよ」

千冬「楽観視しすぎだ」

志熊「そうですね、ですが、未来は分かりませんから（本当はある程度は分かるのだが）」

千冬「さて、そろそろ私は行くぞ」

志熊「分かりました」

セシリアの部屋

セシリア「赤城・・・志熊・・・」

セシリアはシャワーを浴びながら今日のことを思い出していた。

セシリア「（そういえば、父は母の顔色を窺ってばかりでしたわね）」

セシリアの記憶には自身の父親が弱々しい態度でいたことを思い出す。

セシリアの母親は女尊男卑の前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていった人だった。厳しかったが、憧れの人だった。

だが父は母の顔色を窺ってばかりだった。

ＩＳが出て女尊男卑の社会になってからはさらにそれが顕著になった。

そんな父を見てきたから男が嫌になり始めていた、そして3年前にその父と母は大事故によって他界してしまったのだ。

そして残されたのは莫大な遺産。

そしてそれに群がる金の亡者達。

パーティーなどがあればセシリアの遺産を取ろうとする者、媚び諂い取り入ろうとするもの。

結婚の話も出てきたが、亡者達の本性を知ってるセシリアには苦痛でしかなかった。

だから、セシリアは努力した・・・そして国家代表候補生となって遺産を守ることができた。

だが、そのせいなのだろうか？自身は相手のことをよく知らずに自分の勝手な思い込みによって格下だと決めつけていくようになったのは。

セシリアはもう一度、自分の憧れていた母親を思い出す。すると自身の母親は相手を一方的に見下してなどいなかったことを思い出す。

セシリア「わたくしは一体何をしてきていたのでしょう・・・母はちゃんと相手の評価が出来る人なのに）」

セシリアは理解した。

セシリア「（まだ、間に合いますわよね？セシリア・オルコット）」

そしてセシリアはまた赤城志熊を思い出す。

セシリア「（赤城志熊・・彼の瞳は意思に満ち溢れていた、まるで折れない剣のごとく・・・そして・・・灼熱太陽すらも霞むほどに・・・それに穏やかな優しい瞳も・・・その穏やかな瞳は春の暖かな風のような・・・わたくしは彼が知りたいですわ・・・）」

そしてセシリアの胸がトクンと高鳴るのだった・・・

主人公設定（前書き）

主人公のＩＳも出てきたのでここらでプロフィールをと思います。

主人公設定

名前　赤城　志熊　（あかぎ　しぐま）

年齢　１９歳　（ただしこれは人間でいた時の最後の年齢だったためであり、外なる神となってからは時間とかの概念から外れてる世界とかにいたりするため不明）

身長　１８７ｃｍ

体重　７０ｋｇ

体格　筋肉は結構あるがムキムキではない（レッド・アイズに出てくるグラハルト・ミルズみたいな体格）

特徴　髪の色は黒で後ろのほうの髪だけが腰まで伸びている（戦国ＢＡＳＡＲＡの真田幸村みたいな感じにである、ただし、後ろの髪は真田幸村よりもさらさらであり、根元をゴムみたいなもので縛っている）　目は左が黒金で右が金色のオッドアイ

正確　割りと冷静で面倒見がいい。ただし、戦闘中は静かに燃えるタイプである。（表情や声にはあまり出さないが）
あとは兄貴気質なのか他人の頭を撫でる癖がある（撫でられた側はとても気持ちいい）

種族　外なる神

真名　今はまだ無い

二つ名　全ての滅びを従えし不滅

眷属　ハスター　クトゥグア　（出るか不明）

趣味　人間時代はよくゲーセンに行ってたと本人談、あとは釣りとかもしてたそうだ。
現在は魔術書作りが趣味かもしれないとの事

交友関係　ナイアルラトホテプの化身の一つ美貌の神（ＭＵＧＥＮのナイア・ルラトホテプみたいな外見である）や他の化身達（その化身は総じてあまり悪いことはしない奴ら）
ルシファー（外見はマンガ版デビルチルドレンのルシファーの金髪バージョン
旧神大十字九郎、アル・アジフ（これはお約束？）
今後追加されるかも・・・

敵対関係　ナイアルラトホテプの化身（所謂デモンベインのナイアみたいな奴ら総じて敵対関係の化身のほうが多い）
旧支配者や外なる神や旧神以外にいる外次元存在（これらは名前が不明である）

立ち位置　全ての旧支配者や外なる神どころかアザトースさえも滅ぼせる存在である。（つまりはリセットボタンどころか最終阻止兵器である）いつもはふらふらしてたり他のナイアルラトホテプといった外なる神や旧支配者の企みを潰したりしている。

備考　赤城志熊は外なる神の一柱であるが旧神になった大十字九郎と過ごすことで邪神らしくない考えを持つようになった。
だから、他の邪神達の企みを潰しているのだそうだ。（ただし、ナイアルラトホテプ曰くこれは私たちの遊びのようなものらしい）
さらに珍しく他の旧神からもそんなに敵対視されていない。
意思の奥深くは折れない剣の如くとか燃え尽きない太陽すらも霞むほどだとかというほどのものを持っている。
あとは春風のような暖かさや全てを包み込む優しさといったのもある。
ついでにフラグメーカーで割りと気づかないうちにフラグを立てていたりする。
さらには朴念神のため相当鈍い。
年上キラー？も搭載している。
一夏と一緒にもげろとか爆発しろとか起きなければいいが・・・・

ＩＳ

名前　ネームレス・アバター（意味は名も無き化身）

性能　基本的にワンオフ・アビリティーに依存してい

るためこの機体単体では大して強くない。
ただし、第一次移行後は変化する機械化身によって性能が変わる。

ワンオフ・アビリティー　アバターシステム
あらゆる世界（平行世界や別次元世界）そして、過去・現在・未来から機体情報を収集して自ら変化するシステムであり、性能はリミッターを外さなければ限りなくオリジナルに近い性能を発揮する。（リミッターは主に武装面であり、基本性能はそうでもない）
また、現状では最大１２機まで瞬時変化が可能である。（瞬時変化とは機体内に情報をセーブする事によりアバターシステムにアクセスしないで使用する方法である。また、アバターシステムを使うと情報取得中は無防備になるためこれは今後重宝する）

待機形態　六亡星の中に燃える目という紋章になって左手の甲に浮かび上がってる。

備考　現在はレジェンド・ガンダムとガンダムエピオンを確認。
また、スパロボＯＧからラピエサージュも出現予定。
ネームレス・アバターはある一定以上の能力を持つ機体にはまだなれないとの事。（例えばグランゾンとかツヴァイザーゲインとか所謂チートどころか理不尽機体である、また、デモンベイン等の機械神にもなれないらしい）

以上ですかね？

また何かあれば追加します。

代表就任とその後（前書き）

更新ペースが保てるのはいつまでなのか・・・・

そして、今回はあのキャラを出します。

しかも、性格が改変されます。

会長とかも予定より早く出します。

代表就任とその後

代表決定戦から次の日・・・

真耶「わがクラスの代表は織斑一夏君に決定しました！あ、なんか一繋がりでいいですね。」

このクラスは一年一組で代表が一夏だからである。

一夏「え！？ちょっと待って下さい！どういう事だ！？」

志熊「俺とオルコットは辞退したからな」

一夏「なんで・・・」

志熊「理由は一夏を鍛えるためだ」

セシリア「代表となれば模擬戦とかが普通の人より多くできますから」

志熊「一夏にとってはメリットのほうが大きい」

一夏「つまりは俺のためか？・・・もしかして・・・本当はやりたくないだけじゃ？」

志熊「別にそういうわけではないが」

一夏「本当にそうか？」

志熊「まぁ、お前の補佐くらいはするさ」

一夏「そっか、わかった」

セシリア「ところで志熊さん？」

志熊「なんだ？（ん、名前で呼ばれたな）」

セシリア「今度からわたくしの事はセシリアとお呼びくださいな」

志熊「あぁ、わかった、セシリア」

セシリア「はい♪」

そして授業・・・

千冬「今日は初めての実習だ、織斑・オルコット・赤城はＩＳを展開しろ」

すると志熊とセシリアはすぐに展開した。

千冬「オルコットは問題無いな」

志熊は展開した時にまた違う機体になっていた。

ＡＳＫ－Ｇ０３Ｃラピエサージュ（フランス語で意味は継ぎ接ぎ）

黒い猛禽を彷彿とさせる機体で左腕に５連チェーンガン右腕に鉤爪のような武器（マグナムピークという）が装着されている。背中にはウイングバインダーが装着されている。

千冬「・・・問題は無いが・・・なんでまた違う機体になっている？」

志熊「・・・これは所謂万能機です。レジェンドやエピオンみたいな特化機よりもこいつのほうがいいかと思いまして」

千冬「そうか・・・もう何も言わん」

ちなみに今まで使っていた機体化身は全てフルスキンであるためにそれでさらに驚かされている生徒達であった。

千冬「よし、まずは飛んでみろ。
高度は２００メートルだ」

飛び立つ志熊達であるが白式が遅れていた

千冬「志熊の機体はともかくブルー・ティアーズより白式のほうが速度は上だぞ」

一夏「んな事言ったってそもそもどうやってＩＳが飛んでるのかも分からいのに」

志熊「理論的な事を言ってもいいが難しい上に半日は潰れるぞ？」

一夏「遠慮します・・・」

セシリア「イメージは所詮イメージです、自分やりたいように飛べばいいのですわ」

一夏「志熊はなにをイメージしているんだ？」

志熊「ゲームだな」

一夏「ゲーム？」

志熊「あぁ、ロボットもののゲームだとイメージしやすいからな（本当は生身でも問題なく空飛べるからなのだがな）」

一夏「なるほどな」

箒「一夏！いつまでそこでちんたらやっている！！」

箒が真耶のマイクを奪っていた。

ちなみに真耶は涙目である。

千冬「それでは降りて来い。目標は地上から１０センチだ。」

セシリアは１０センチ

志熊も１０センチ

そして一夏は

一夏「ロケットのようなイメージで！」

ドガーン！！一夏は－３メートル

千冬「誰がクレーターを作れと言った・・・」

箒「何をやってる馬鹿者！」

一夏「くそ～」

そう言うとチャイムが鳴った

千冬「今日の授業はこれで終わりだ、織斑はグラウンドを埋めとけ」

一夏は志熊に捨てられた子犬のような視線を送るが・・・

志熊「これも経験だ」

と言って去っていった。

一夏「ちくしょう・・・」

一人穴を埋める一夏であった・・・

放課後・・・

セシリア「志熊さん、ちょっとよろしいですか？」

志熊「なんだ？」

セシリア「あの、志熊さん達は放課後一緒に訓練されてるとか？」

志熊「あぁ、一夏と箒と俺の３人だな」

セシリア「わたくしも仲間に入れてもらえないでしょうか？」

一夏「いいんじゃないか？」

箒「私も構わない」

志熊「というわけだ、早速だが今日からよろしく頼む」

セシリア「はい！こちらこそよろしくお願いします！！」

こうしてセシリアも訓練に参加する事になった。

一夏「なんだよ・・あのラピエサージュってやつは・・・反則だろ・・・」

只今動くターゲットに射撃するという訓練をしている俺とセシリアであるが

セシリア「凄いですわね・・・」

何が凄いのかというとラピエサージュの装備するO．Oランチャー（O．Oとはオーバーオクスタン略である）の実弾で的を正確に打ち抜き、エネルギー照射でさらに的を消しているのだ。

志熊「これは予測撃ちをしただけだ、ラピエサージュの性能だけってわけではない」

セシリア「予測撃ちって・・・」

その予測撃ちが正確すぎるのだ

一夏「百発百中じゃないか・・・」

志熊「機械の動きはパターン化されてるからな、まぁ・・人間も結構そういう奴が多いが」

ついでに先程校内の記録でナンバーワンになっていたりする。

セシリア「あの・・・」

志熊「どうした？セシリア」

セシリア「もしかして織斑先生越えたりとかできますか？」

志熊「あぁ、武装を全て使えば問題ないだろうな」

腐っても外なる神である、簡単に人間には負ける事はない。

もっとも、その邪神に打ち勝った人間もいることはいるのだが・・・

次は一夏を鍛えるのだが

志熊「攻撃については暫く箒の剣道でいいだろう、俺が教えるのは回避と防御だ」

一夏「わかった」

志熊「なら、いくぞ」

その後アリーナに悲鳴が響き渡った・・・

一夏「ぜぇ・・ぜぇ・・」

志熊「よし、今日はここまでにしとくか」

箒・セシリア「鬼だ（ですわね）」

志熊「俺は鬼じゃなく邪神だ」

あっさりばらすが

一夏「なお悪いわ！」

冗談にしか聞こえなかったようだ。

それから暫くして・・とある休日

志熊「暇だな・・・一夏は家に掃除しに行ってるしな・・・あ、買い物行かないとな」

そして着替える志熊・・・服装は白Yシャツに黒のタンクトップとジーンズである。

ちなみにタンクトップの絵柄が虫の羽のような模様のところに髑髏が描いてあるという（所謂ベルゼブブの羽である）もので首からシルバーのドックタグ付きネックレスをしている。

そのまま外に出ようとすると

千冬「赤城」

志熊「なんですか？」

千冬「今は暇か？」

志熊「一応は暇ですが」

千冬「丁度いい、お前の日用品とか買いに行こうと思っていたところだったんだ」

ちなみに志熊は無一文だったので金（きん）を質にでも入れてこようと思っていたのだ。
ちなみに金の作り方は魔術で適当な物質の情報を分解、書き換え、再構築して作るのだ。

うん、卑怯だ。

志熊「なら、買い物ついでにこれを質に入れたいのですが」

千冬「・・・これは・・金か？」

志熊「えぇ、ここに１Ｋｇあります」

千冬「これは魔術で作ったのか？」

志熊「そうです、バイトはする暇無いですし」

千冬「・・・わかった・・・今は黙認しよう・・・私の車に乗れ」

志熊「分かりました」

車内にて・・・

千冬「そういえば、お前は１９だったな？」

志熊「まぁ、普通の人間の時はですが」

千冬「普通？」

志熊「魔術師になってから年をとらなくなったのでそれも合わせると軽く１００歳以上ですかね」

千冬「・・・そうか・・姿はそれでも人生としては先輩なのだな・・・プライベートでは敬語はつかわなくていいぞ？」

志熊「そうか、助かる。それで何処に行くんだ千冬？」

千冬「レゾナンスと言って超大型のショッピングモールだ」

ショッピングモールレゾナンスは駅と合体してるショッピングモールでここに無ければ他のところには無いと言えるほどの品揃えである。

志熊「千冬、あれか？」

千冬「あぁ、あれがレゾナンスだ」

到着後・・・

志熊「まずは換金したいのだが」

千冬「ならばこっちだ」

質屋にて換金中・・・金だけに・・・・

ちなみに現実ではとあるサイトでは金をグラム約４０００円で買取してたのでそれと同じ換金率にした。

つまりは４００万である。

志熊「よし、買い物を始めるか」

小物や雑貨を次々と買っていく二人だが、途中で志熊が・・・

志熊「千冬、ちょっとこっちに寄るぞ」

そう言ってゲームショップに入って行く。

そこで最新のＴＶゲームや携帯ゲームを買ってく志熊、千冬はため息を吐きながら。

千冬「志熊、程々にしとけ」

志熊「あぁ、分かっている」

結局は携帯ゲームとソフト3本とＴＶゲーム機を買っていった。

次は釣具屋に寄ってバスロッドセットとトラウトロッドセットとバス用のルアーセットとトラウト用のルアーセットを買っていった。

（ちなみにバスロッドセットやトラウトロッドセットはロッドに糸

付きリールがセットになって売っている。）

予想以上の買い物に千冬は呆れていた。

千冬「良かったな、私が車で来て」

志熊「あぁ、助かる。」

千冬「ならば、昼食は期待してもいいだろ？」

志熊「構わないが・・美味い場所を俺は知らないぞ？」

千冬「付いて来い」

付いた場所はレゾナンス内で好評の和食屋であった。

値段はそれなりである。

志熊「・・・ほう、この鰻は美味いな。」

志熊はうな重セットを食っている。

千冬「どれ・・一口くれ・・・確かに美味いな」

千冬は天ぷらや小さな鍋のセットである。

志熊「この鍋と天ぷらも美味いな」

千冬「そうだな・・・車じゃなければ日本酒を追加してたな」

志熊「なら、次は電車で来るといい、また奢ってやる」

千冬「ふふ・・そうか、楽しみにしている」

周りから見ればデートそのものである。

食べ終わり、買い物を再開しようとしたときに千冬の携帯が鳴った。

千冬「・・あぁ・・分かった、すぐに戻る」

志熊「どうかしたか？」

千冬「急用が入ったから悪いがこれで失礼する、荷物は先に運んどくから安心しろ」

志熊「それでは頼む」

そして千冬は帰っていった。

志熊「さて、本でも買いに行くか・・・」

とそう思ったときに

？「おい」

志熊「俺か？」

？「あぁ、お前だ」

志熊「何か用か？（・・・こいつ・・・千冬に似てるな）」

？「道に迷ったのだが・・・」

志熊「何処に行きたい？」

？「〇〇という喫茶店だ」

志熊「確か、そこはここから逆方向だな」

？「・・・案内しろ」

志熊「案内するのは構わんが、年上の相手に命令はするな」

？「ふん」

志熊「別に俺は敬語を使えとは言わん・・だが、会ってすぐの人間に命令など品性を疑われるぞ？」

？「どうでもいい、案内するのか？しないのか？」

志熊「してやる、お前みたいな奴は無駄にトラブルの種になりそうだからな」

？「・・・」

志熊「それで、俺の名前は赤城志熊だ。お前の名前は？」

？「・・・マドカだ・・・」

志熊「そうか、よろしくな」

マドカ「・・・あぁ」

志熊「（なんか壁があるな、まぁ、構わんが）」

その後喫茶店にて

マドカ「・・パク・・・パァァァ／／／」

志熊「ほう、ここはなかなか美味いな」

マドカ「パクパク」

志熊「なぁ、マドカ」

マドカ「なんだ？」

志熊「睨むな、それはいいとしてだ・・ケーキは初めてか？」

マドカ「・・・悪いか？」

志熊「悪いとは言ってない、ただ、、珍しいからな」

マドカ「そうか・・・わたしの所の食事は栄養重視なものしかないからな」

志熊「例えば？」

マドカ「エネルギーバーみたいな固形の奴とかスープみたいなやつ

とかだ」

志熊「チョコレートのか？」

マドカ「・・・食ったほうが早い」

そう言って渡された一本のバーは硬くて甘しょっぱくてちょっと油っぽいという不味いものだった。

マドカ「これが3本で一日の栄養は事足りる」

志熊「味は最悪だな・・・」

マドカ「・・・今まではこんな食事だった・・・気付いたら慣れてたけど、今日・・初めて街に出てケーキを食べてみて・・美味いな」

志熊「奢ってやるから好きなだけ食え」

マドカ「いいのか？」

志熊「それに今日初めてなんだろ？その記念だ」

マドカ「・・・・ありがとう／／／」

マドカは小さな声でそう言った。

その後は二人でゲーセンやボーリングなどで遊んだ。

帰り際に駅の改札にて・・・

マドカ「今日は楽しかった」

その笑顔は最初のころとは違い少女特有の可愛さがあった。

志熊「いや、こちらも楽しんだからな」

マドカ「いつか、また会えるか？」

志熊「あぁ、会えるさ・・そうだ、これは俺の携帯のメアドと電話番号だ」

マドカ「すまないが、わたしはそういうのを教える事ができないんだ・・・」

志熊「別に構わんさ（まぁ、あんな食事をさせる場所が普通なわけがないか）」

マドカ「連絡できるときはするから」

志熊「あぁ、楽しみにしてる」

マドカ「またね」

志熊「あぁ、またな」

帰宅後・・・

志熊「マドカ・・・か（アカシックレコード介入開始・・・情報取得・・・ふむ・・・これは中々だな

・・亡国機業か・・・これから色々あるだろうからな、人脈作りで

もするか）」

それからは外なる神によるカリスマなど（ほぼ理不尽に）で各国政府や大型企業と太いパイプを作ったのであった。

それから数日後に隣のクラスに転校生が来るのであった。

強襲？セカンド幼馴染（前書き）

うーん、なんか書きたくなるんですよね・・・

大丈夫かな？

それでは開始します。

強襲？セカンド幼馴染

朝の登校途中・・・

抜いてね！といわんばかりに志熊の前にウサギの耳みたいなものが突き刺さっていた。

志熊「なんだ？これは・・・嫌な予感しかしないものを抜くほど俺は愚かではないからな」

そして去っていく志熊・・・ポツンと残されるウサミミ・・・

教室内にて

志熊「転校生か・・・」

朝のＳＨＲの前の話題は隣のクラスの転校生の事だった。

一夏「どんな奴なんだ？」

少女Ａ「なんか、中国の代表候補生みたいだよ」

志熊「なるほどな・・・一夏、一応気をつけろ」

一夏「ん？なんでだ？」

志熊「一夏は数少ない男でＩＳが使えるからな・・・もしかするとお前に接触するためという可能性があるからだ・・・」

一夏「なるほどなぁ」

志熊「しかし、今は来月のクラス代表戦の事だな」

箒「そうだぞ、転校生を気にしてる場合ではないぞ、一夏」

一夏「分かってるよ・・・まぁ、やるだけやってみるか」

箒「そんな弱気でどうする？男なら優勝を狙うとか言ってみろ」

セシリア「そうですわね、一夏さん、そのくらい意気込んでもいいと思いますわ」

少女N「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

少女B「織斑くんフリーパスのためにも頑張ってね！」

少女C「代表が専用機持ちはいまのところうちのクラスと四組だけだから余裕だよ」

（確か・・４組の専用機はまだ未完成だったはずだが・・・）

志熊が思考していると。

？「その情報、古いよ！」

志熊「む？なんだあいつは？」

？「二組のクラス代表も専用気持ちになったからそう簡単には勝たせないよ！」

一夏「もしかしてお前、鈴か？」

鈴「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきたってわけ」

一夏「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

鈴「んなっ…！？なんてこと言うのよあんたは！」

志熊「おい、セシリア・箒、席に戻れ、千冬先生が来るぞ」

すぐに戻る二人。

志熊「３・２・１」

ゼロと言うと同時にスパン！といい音が鈴の頭から鳴った。

千冬「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

鈴「ち、千冬さん・・・」

千冬「織斑先生と呼べ。そして入口を塞ぐな」

鈴「す、すみません・・・また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

千冬「さっさと戻れ」

鈴「は、はいっ！」

一夏「相変わらず千冬姉のことが苦手なんだな」

志熊「面倒な事にならなければいいが・・・」

昼休み・・・

箒「一夏！お前のせいだ！！」

志熊「それはあまりにも理不尽だろ・・・箒」

箒は午前の授業中に真耶から注意を受けること五回、千冬から出席簿アタックを喰らうこと三回という状態だった。

ちなみに志熊は寝ながら授業を受けるという荒業をいつもやっているが・・・（その時は意識は寝ているがコピー機よろしく黒板の内容はノートに写している・・・目が開いてるから怖いな・・・）

一夏「いいから飯を食いに行こうぜ？」

志熊「そうだな、セシリアも一緒に行くか？」

セシリア「はい、ご一緒させていただきますわ」

食堂で鈴がラーメンをお盆に乗せながら仁王立ちしていた。

鈴「待ってたわよ、一夏！」

一夏「鈴、そこにいると食券出せないし、通行の邪魔になるぞ」

志熊「スルーか・・・」

一夏「ラーメンのびるぞ」

鈴「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！早く来なさいよ！」

一夏「食券交換しないで待てばよかったんじゃ・・・」

鈴「う、うるさいわね！」

志熊「あそこの席が空いてるぞ」

ちょうど全員座れる場所を見つけた志熊が着席を促す。

そして、食事中・・・

一夏「ちょうど一年ぶりか？元気だったか？」

鈴「元気だったわよ。あんたこそ、たまには怪我病気をしなさいよ」

一夏「どういう希望だよ・・・っとそうだ、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさんは元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

鈴「質問ばっかしないでよ。アンタこそニュースで見たときびっくりしたじゃない」

箒「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが、まさか付き合ってるのか！？」

鈴「べ、べべ、別に～」

一夏「いや、全然違うぞ。ただの幼なじみだよ」

そう一夏が言うと鈴が一夏を睨んだ。

一夏「？何睨んでるんだ？」

鈴「なんでもないわよっ！」

志熊「おかわりしてくる」

ちなみに今日の昼食は一夏と箒は日替わり定食（今日は鯖のみりん焼）で鈴がラーメンでセシリアがサンドイッチで志熊はカレーとマーボー丼ときつねうどんである（しかも、全て大盛りで同じものを三回おかわりしていた）

一夏「ほら鈴、こっちが前に話した箒だ。小学校の頃、俺が通っていた道場の娘」

鈴「ふうん、そうなんだ…初めまして。これからよろしくね」

箒「ああ、こちらこそ」

なんか二人の間で火花が散っている。

鈴「ところで、あんたたちは？」

セシリア「わたくしはセシリア・オルコットと申しますわ、イギリスの代表候補生です。」

鈴「あたしは鳳鈴音よ、鈴でいいわ、よろしくね」

セシリア「はい、こちらこそ」

鈴「それで、そっちは？」

志熊「モグモグ・・・む？俺は赤城志熊だ、志熊でいい・・よろしく頼む」

鈴「うん、よろしくね」

志熊「ところで一夏、幼馴染は箒じゃなかったのか？」

一夏「箒は小学校5年になったときに引っ越して、その後鈴が中学3年の初めまでいたから箒がファースト幼馴染で鈴がセカンド幼馴染ってやつだな」

箒は少し得意げに

箒「まぁ、一夏をとは食事を一緒にする中だったからな」

鈴「そうなの？」

一夏「あぁ、箒の道場でお世話になっててて千冬姉と一緒に時々な」

鈴「それならあたしも一夏とよく一緒だったわよ？」

箒「なんだと！？どういうことだ、一夏！！」

一夏「ん？鈴の家が中華料理屋でさよく鈴の店で食べてたんだ」

箒「そうか、それならおかしくないな」

鈴「くっ・・・」

一夏「そういえば、親父さんは元気か？」

鈴「あー、うん・・多分、元気だと思う」

一夏「？そうか」

鈴「ねえねえ一夏、それよりも。アンタ、クラス代表なんだって？」

一夏「まあ、成り行きでな」

鈴「あ、あのさぁ。アンタのＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

一夏「そりゃ、助かるぜ」

箒「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ！」

鈴「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでよ」

箒「か、関係ならあるぞ。一夏にどうしてもと頼まれてるのだ」

セシリア「ですが、鈴さんは二組の代表ですわよね？まだ、クラス対抗戦が終わってませんしここで一緒に練習したらお互いの手の内を晒すことになりますわよ？鈴さんはいいかもしれませんが、一夏さんが情報を晒した場合は勝負にすらならないと思いますが？」

鈴「それもそうね」

志熊「まぁ、そういうわけだ、我慢してくれ」

鈴「わかった。それじゃ、一夏、訓練終わったら会いに行くから」

一夏「あぁ、わかった」

放課後の訓練中・・・

セシリア「志熊さん？」

志熊「なんだ？」

セシリア「よろしければ、模擬戦の相手をしてくださいませんか？」

ちなみに一夏は打鉄を借りてきた箒と訓練中である。

志熊「構わんぞ、早速やるか？」

セシリア「はい、お願いします。」

志熊「機体はラピエサージュでいくぞ」

セシリア「わかりましたわ」

そして模擬戦開始と同時に着弾指定型マイクロミサイルを発射する

志熊のＩＳ

セシリア「甘いですわ！」

志熊「甘いのはそっちだがな」

セシリア「え？」

そう言いながられスターライトＭＫ－？からレーザーを発射するがすぐにに霧散した。

セシリア「どういうことですの！？」

志熊「まぁ、ネタばれするとビーム撹乱粒子散布用の弾頭にしただけなのだがな」

セシリア「・・・卑怯じゃないですか？」

志熊「範囲はこのアリーナ全域だが、効果時間は最高でも１０分くらいが限界だ」

セシリア「ならば、十分避け続ければ・・・なっ！」

志熊「遅い」

ズドン！と思い音が鳴ったと思ったら射突したマグナム・ビークがセシリアの胸に直撃していた。

セシリア「がっ・・」

志熊「これで終わりだ」

零距離から5連チェーンガンを叩き込み、そこからO．Oランチャーを実弾モードにして数発撃ち込んでブルー・ティアーズのシールドエネルギーを0にした。

セシリア「これでは訓練になりませんわ・・・」

志熊「ふむ、まだ早かったか・・・」

志熊は今回絶望的な状況下でその状況を突破ないしもしくは諦めないようにと思ってやったのだがまだセシリアには伝わらないようだった。

志熊「拗ねるなセシリア」

セシリア「ですが・・・」

志熊「どうすれば、機嫌を直してくれる？」

セシリア「では、今日の食事はその・・・ごにょごにょ・・・」

志熊「食事か・・・（後半よく聞こえなかったが）なぁ、今日は俺が飯作ってやろうか？」

セシリア「え？いいんですの！？」

志熊「あぁ、と言っても期待はするなよ？」

セシリア「どんな料理でも大丈夫ですわ！！」

志熊「あぁ・・・分かった（なんか一気にハイテンションになった

な）」

その後寮内にて・・・

志熊「セシリア、出来たぞ」

セシリア「今日の献立はなんですか？」

志熊「ん？ホワイトシチューだが、嫌いだったか？」

セシリア「そんなことはございませんわ」

志熊「まぁ、固形ルーを使って作ったものだから不味くはないと思うが」

セシリア「モグモグ・・美味しいですわ、本当に固形ルーですの？」

志熊「あぁ、だが、レゾナンスで一番高い奴だったからな」

セシリア「最近は固形ルーも馬鹿にできませんわね」

志熊「そうだな」

セシリア「パンも美味しいですわね」

志熊「一応焼きたてを食堂からもらってきたからな。」

セシリア「・・・」

志熊「どうした？」

セシリア「いえ、このシチューが美味しいのはやはり志熊さんの愛情が・・・ごにょごにょ・・・」

志熊「？・・まぁ、美味いのなら構わんか」

食後のティータイム中・・・

セシリアが持ってきた紅茶を楽しんでると隣（一夏の部屋）が騒がしいので様子を見に行くと、泣きながら走り去ってく鈴とすれ違った。

コンコン・・・

志熊「すまんが、邪魔するぞ」

一夏「あ、あぁ・・どうした？」

一夏の頬が赤くなっていた。

志熊「なに、お前の部屋が騒がしいから様子を見に来ただけだ」

一夏「いや、それはだな・・・」

志熊「鈴が泣いてたのと何か関係あるのだろうな」

一夏「あぁ、そうだと思うが・・・」

志熊「どうした？」

一夏「俺も何がなんだかさっぱりでさ」

志熊「箒、お前は分かってるのか？」

箒「あぁ、理解しているが・・・」

志熊「そうか、それは解決しそうか？」

志熊がそう言うと箒は渋い顔ををした。

志熊「内容を聞いてみてもいいか？」

そう言うと、一夏が説明してくれた。

内容はこうだ、鈴が箒と部屋を変えてくれという事から始まってそれから鈴と一夏が昔した約束の話になったが一夏は間違って覚えていたそうだ。

それで鈴が怒って一夏に平手打ちにして出て行ったという。

ちなみに一夏は約束の内容を「私が酢豚を毎日奢ってくれる」と間違えて覚えていたらしい。

志熊「そうか・・・（毎日酢豚とかキツすぎないか？）」

ここにも分かっていない奴がいた・・・流石は朴念神！なんともないぜ！！

志熊「とりあえず、一夏はなんでこうなったか理解するための行動をしろ。

その後に仲直りしたほうがいいからな」

一夏「分かったよ」

志熊「言っておくが、鈴の表情は怒り以上に悲しみのほうが大きかったぞ。
一夏・・・お前は知らずのうちかもしれんが、鈴を傷つけていたという事を忘れるな。
それでは邪魔したな」

自室に戻りセシリアに先程の事を話すと盛大なため息が出た。

セシリア「はぁ・・一夏さんは鈍いにも程がありますわね・・・鈴さんが可哀想ですわ」

志熊「む？お前はもう解決の糸口を見つけたのか？」

セシリア「えぇ、って志熊さんもまさか鈴さんが怒った理由が分かりませんの？」

志熊「あぁ」

セシリア「はぁ～～・・・いいですか？私のお味噌汁を毎日飲んでくれますかって？台詞は知ってますわよね？」

志熊「知らんが」

セシリア「・・・この台詞はプロポーズの時に使われる台詞ですわ・・・ですから、鈴さんが言った約束の内容はその味噌汁を酢豚に置き換えた内容だって事ですわ」

志熊「なるほどな」

セシリア「というか・・この台詞は有名ですわよ？」

志熊「俺はアメリカ育ちだからな」

ちなみに志熊は一応アメリカのプロヴィデンスという街から来たという事になっている。（ＩＳ学園が偽造した）

セシリア「・・・そうですか・・・」

そう言って立ち上がると一枚の写真がセシリアのポケットから落ちた。

志熊「これは・・・一夏の代表就任パーティーの時のか・・」

セシリア「あ、はい」

代表就任パーティーとは遡ること数日前・・・

女子Ａ「織斑君、代表就任おめでとー！！」

ワー！ワー！

一夏「あ、あぁ・・・にしても・・・なんだか人数が多すぎないか？」

そう、今このパーティーには自分のクラスはおろか他クラスの生徒まで来ているのだ。

そして、ちょっと離れたところで寛いでる志熊とセシリア。

志熊「・・・こういう場だから騒がしいのはは構わんが、俺はあの輪の中には入りたくはないな・・・」

セシリア「そうですか、まぁ・・私もですけど・・・」

志熊「それよりも、ありがとう」

セシリア「え？」

志熊「クラス代表辞退してくれ」

セシリア「いえ、わたくしも大人気なかったですし」

と会話してると・・・

？「はーい、私は新聞部部長の黛薫子でーす。

クラス代表の織斑一夏君と赤城志熊さんの取材に来ました。」

志熊「新聞部だと？」

セシリア「そのようですわね」

薫子「まずは織斑一夏君クラス代表になった感想をどうぞ」

一夏「えっと、頑張ります」

薫子「えー、もっといいコメント無いの？」

一夏「自分・・不器用ですから」

薫子「うわ、前時代的！まあ適当に捏造させてもらうよ」

そして次は俺のところへ来る薫子。

薫子「それでは次は赤城志熊さん、二人目の男性操縦者として何かコメントをお願いします！」

志熊「俺に挑むなら・・・その時その瞬間は意思と力こそが全てだ、俺を越えてみせろ！！」

薫子「格好いい！！是非使わせてもらいますね」

志熊「あぁ」

薫子「それではセシリアちゃんも何か一言」

セシリア「では、代表候補生とセシリア・オルコットの名に恥じないように頑張りますわ」

薫子「んー・・・普通過ぎるから赤城さんに惚れましたでいいや」

セシリア「なっ！そんなことは・・・／／／」

薫子「あれ？織斑くんだった？」

セシリア「いえ！赤城さん・・ハッ！！」

薫子「へ～、そうなんだ」

セシリア「あ、あう・・・／／／」

薫子「それじゃ、３人並んでね。
写真撮るから～」

セシリア「その写真はもらえるんですの？」

薫子「そりゃ、もちろん３人ともあげるよ。
それじゃ、撮るからね～・・・３５×５１÷２４は～？」

一夏「え？」

志熊「７４．３７５だ」

薫子「正解」

パシャ！

気付けばみんな写真に入り込んでいた。

ちなみに志熊はそれに気付いたのかセシリサを自分の方向へ引っ張り結果として抱き寄せる事となった。

女子Ａ「いいなぁ、セシリア」

女子Ｂ「抜け駆けはなしでしょ～」

セシリア「いえ、これは不可抗力で・・・／／／」

志熊「ん？皆どうかしたか？」

セシリア「いえ、なんでもありませんわ！」

志熊「そうか」

そして現在・・・

志熊「そういえば、俺はまだあの写真もらってないな。
明日にでも貰ってくるとするか」

セシリア「そうでしたか」

志熊「っと、もうこんな時間か。
今日は解散しよう」

セシリア「そうですわね、それでは今日はご馳走様でした。
また、誘ってくださいな」

志熊「あぁ、わかった。
では、お休み、セシリア」

セシリア「お休みなさい、志熊さん」

それからクラス対抗戦前最後の練習の日・・・

一夏と鈴がまた喧嘩していた。

そしてその時の一夏の発言にキレたりんが特殊合金の床を凹ませた。

志熊「一夏、貧乳は酷いだろ・・・」

一夏「あぁ、言い過ぎた・・・」

更衣室で反省会をする二人だった。

そして、クラス対抗戦が始まった・・・・

強襲？セカンド幼馴染（後書き）

今回は志熊の薫子にしたコメントはＡＣＮＸからシノーヴィーの台詞をアレンジしたものを使用しました。

ちなみに元の台詞は

「今この瞬間はちからこそが全てだ、私を越えてみろ！」

です。

格好いいですね、ジノーヴィー

それでは今日はこのへんで失礼します。

クラス対抗戦（前書き）

最近思うのですが、クトゥフ的な内容をいれた話が少ないきがします・・・

でも、クトゥルフ入れるとみんな発狂してしまうし・・・まぁ、デモベ的な感じにすれば大丈夫かな？

それでは開幕です。

クラス対抗戦

クラス対抗戦当日・・・

志熊はＶＩＰ席にいるある人物達と話してした。

志熊「まさか、呼ばれるとは思わなかったぞ？」

？「なに、試合中に私たちの質問に答えてもらいたいと思ってな」

今話してる人物は企業連合と呼ばれてる組織のトップでジャック・Ｏと言う。

ついこの前に暗殺されそうだったジャックを助けたのがきっかけで知り合ったのだ。

ちなみに今の企業連は優しく、真面目で未来へ可能性を模索できる企業しか加盟できないというなんともすごい組織である。（綺麗さ加減で）

影響力はアメリカなどの先進国以上である。

出資母体はアライアンスと呼ばれる元クレスト、ミラージュ、キサラギの３社だ。

今現在加盟中の企業は・・・

ＧＡ（Ｇｌｏｂａｌ・Ａｒｍａｍｅｎｔｓ）

ＭＳＡＣインターナショナル

クーガー

有澤重工
ＢＦＦ（Ｂｅｒｎａｒｄ　ａｎｄ　Ｆｅｌｉｘ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ）
レイ・レナード
オーメル・サイエンス・テクノロジー
ローゼンタール
アルゼブラ
テクノクラート
インテリオルユニオン
アルドラ（アルブレヒト・ドライス）
トーラス

以上が加盟中の企業であるが、どれも超一流の優良企業である。

ちなみにアライアンスは今はその企業連加盟企業の支援や交渉の橋渡し役をやったりしている。

この企業連に加入するには厳しい審査があり、また抜き打ちでチェック（非人道的な事や環境配慮など）が入ったりするために相当の企業しか入れないのだ。

？「まぁ、そういうことだ・・よろしく頼む。」

志熊「了解した」

ジャックの隣にいる奴の名はマクシミリアン・テルミドール。

企業連の武装組織で最強を誇る組織”ＯＲＣＡ旅団”のリーダーであり企業連のナンバーツーである。

テルミドール「さて、そろそろ始まるようだ」

それから試合は進むが・・・

ジャック「やはり、代表候補生同士の戦い以外は大したことがないか」

テルミドール「まだ、入学してからそう日も経っていないだろう」

志熊「まだ、一年なのだから仕方ないしな」

そして、鈴対一夏が始まって暫くした時に突如空からビームが降ってきた。

そして、地上に何かが着地したのか砂煙が上がっていた。

ジャック「これは・・・？」

テルミドール「二人とも私から離れるな」

志熊「あれはＩＳか？」

そう言ってアリーナを見るとそこには通常のＩＳとは違い、全身装甲と異常に長く大きい椀を持つゴリラみたいなＩＳが立っていた。

テルミドール「シャッターが全て降りたか・・」

志熊「少し待っていろ」

そう言って誰かに電話する志熊。

志熊「もしもし、赤城だ」

その頃、モニタールームでは。

千冬「・・・志熊、聞きたい事は分かってる。
現在不明ＩＳは織斑と鳳が相手をしている。
そのＩＳのハッキングのせいでシャッターが開けられず非難できない状態だ。」

志熊「分かった、悪いがシェルターを破壊して一夏の救援に向かうぞ？」

千冬「・・・分かった、頼む」

志熊「あぁ」

そして、ＶＩＰ席では・・・

志熊「二人とも、行ってくる」

ジャック「あぁ」

テルミドール「行って来い」

そう言ってＩＳを展開した姿は白い天使のような機体であった。

志熊「さて、間に合えよ」

そう言って左腕に装着されてるレーザーブレードを振るった。

アリーナ内・・・

一夏「くそ、近づけねぇ！」

鈴「一夏、これ以上は失敗できないわよ！？」

一夏「分かってる！」

？「手こずってる様だな、手を貸そう」

鈴「志熊？」

志熊「あぁ」

一夏「今回は一体なんなんだ？」

志熊「あぁ、今回はノブリス・オブリージュという機体だ」

鈴「貴族の義務ね・・・あんたって貴族だったっけ？」

志熊「いや？」

鈴「なら、なんで？」

志熊「性能のバランスが良くてな、あとはこのシリーズは武器の種類が多いから援護とかやりやすいと思ってな」

一夏「なぁ、あいつってなんで攻撃してこないんだ？」

鈴「そういえば、そうね・・・」

一夏「さっきから動きが変だし・・・」

鈴「何が変なのよ？」

一夏「なんていうかさ、人が乗ってないような感じがするというか・・・」

鈴「はぁ？そんなわけないじゃない」

志熊「いや、一夏の答えで正解だ、あれに生体反応はない」

鈴「えっ？でも、ＩＳは人が乗らないと動かないのよ！」

志熊「”今までは”って事だろう」

一夏「そうか、あれが無人機ならなんとかなるな・・・」

鈴「一夏？」

志熊「零落白夜か・・・」

一夏「あぁ」

志熊「よし、ならば作戦はどうする？」

一夏「俺に考えがある、まずは志熊があの無人機をけん制してくれ」

志熊「了解だ」

一夏「次に鈴は俺が突っ込んだらすぐに衝撃砲を最大出力で撃ってくれ」

鈴「いいけど、当たらないわよ？」

一夏「構わないから全力で撃ってくれ」

鈴「分かったわ」

志熊「なら・・行くか」

一夏・鈴「「応！！」」

まずは志熊のＩＳが実弾のライフルで射撃をする。

ちなみにけん制のための射撃のはずだが威力が高いのか無人ＩＳの装甲が次々と貫いてく。

志熊「あんなに穴だらけにしてもまだ動くか・・・」

するといきなりアリーナのピットから箒が出てきて叫んでいた。

志熊「余計な仕事を増やしてくれるな・・」

無人ＩＳは箒をロックしていたようで今にもビームを放とうとしている。

それをみた一夏は鈴の前に出て

一夏「やれぇぇ！」

鈴「今、撃ったら一夏に当たるじゃない！」

一夏「いいから！！」

鈴「あぁ、もう！どうなってもしらないんだから！！」

そう言って一夏に最大出力の衝撃砲を撃つ鈴。

その衝撃砲は一夏に当然当たるが一夏はその衝撃砲のエネルギーを取り込み瞬間加速に転用した。

一夏「うおぉぉぉぉぉ！！！」

一閃！！一夏の零落白夜を発動した雪平が無人ＩＳを一刀両断する。

一夏「はぁ・・はぁ・・終わったか・・・」

鈴「そう・・みたいね・・」

二人とも緩んだのだろう。

だが、その無人機が鈴に砲口を向けたときに志熊が・・・

志熊「足掻くな、運命を受け入れろ・・・」

そう言って背中に装備している羽のような3連レーザーキャノン×2を最大出力（フロムマジック）で撃ち込み、無人ＩＳを鉄くずに変えた。

志熊「一夏、鈴、怪我はないか？」

鈴「私は大丈夫だけど・・・」

一夏「体中がいてぇ・・・」

志熊「仕方ない、一夏を保健室に運んでおく、後は頼んだぞ？鈴」

鈴「分かった」

そしてクラス対抗戦は中止というかたちで終わった。

志熊「テルミドール、あれはやはり奴が？」

テルミドール「あぁ、多分な」

ジャック「さて、普通ならここで杭を打ち込むところではあるが・・・」

志熊「・・・まぁ、普通に考えれば必要だが、奴には必要ない。」

テルミドール「あれは親のような気持ちで餓鬼の発想をし、行っただけだ。」

志熊「そうだろうな、頭が良い分被害とか考えているから問題は無い。」

ジャック「しかし、奴は今の世界をあまり好いてはいないだろう」

テルミドール「だから、そのうち行動すると？」

ジャック「あぁ」

志熊「クッ・・・ククク・・・」

テルミドール「どうした？」

志熊「いや、なに・・奴は世界を好いていない・・か、自分から世界と向き合わずにいるのにか・・と思ってな」

ジャック「あぁいう人種の考えなど所詮はそんなものだ」

テルミドール「まるで茶番（ファルス）だな」

志熊「さて、奴が行動するときは基本はＩＳ学園を中心にするはずだ」

ジャック「そうだろうな」

テルミドール「ならば、大体の事はお前に任せてもいいか？」

志熊「・・・まぁ、俺の独断で構わんのならな」

テルミドール「最悪の事態にならなければ構わんさ」

ジャック「それに、志熊は社員でもなんでもない。
だから、これは企業連ではなく個人的な頼みなだけだ」

志熊「わかった」

ジャック「では、今日は楽しかった。
次は学園トーナメントでな」

テルミドール「それでは、また会おう」

志熊「あぁ、ではな」

それから数日後・・・

一夏と志熊が寮で勉強中に箒がいきなりドアを開けてきて。

箒「一夏！今度の学年トーナメントに優勝したら、私とつ、付き合ってもらう！！」

一夏「あ、あぁ」

そして箒が出て行ったあとに。

一夏「なぁ、付き合うってどこに付き合えばいいんだ？」

志熊「さぁな、まぁ、一般的なのは買い物だろうな」

一夏「買い物かぁ」

志熊「もしかしたら、旅行かもしれんぞ？」

一夏「温泉かぁ、俺温泉好きなんだよな」

志熊「日帰りなら問題ないが、泊まりだと予定組まないといけなくなるぞ」

一夏「あぁ～、そうだな」

志熊「まぁ、優勝したらだからな、気にしすぎることもないだろ」

一夏「そうだな」

朴念仁と朴念神の夜はこうして更けていく。

次の日・・・

千冬「志熊、丁度いいところにいたな。」

志熊「何か用ですか？」

千冬「次のトーナメントだが、お前が普通に戦うと誰も勝てなくなる」

志熊「そうですね」

千冬「そこで、お前のＩＳは機体制限を設ける。」

志熊「制限範囲は？」

千冬「とりあえず、今まで使った機体は禁止だ」

志熊「他には？」

千冬「そうだな、今までのが禁止の機体のなかで一番弱い機体はなんだ？」

志熊「・・・難しいですね、まずはエピオンやレジェンドはコンセプトが違いすぎますしね。
ラピエサージュは万能機って時点で判断に困りますし・・前回使用したノブリス・オブリージュは元々ネクストというのですが、機動性や運動性、それに装備変更による拡張性でなんとも言えませんし・・・」

千冬「ふむ、出場を辞退するか？」

志熊「それはそれで構わないんですけど・・・それだとお偉方は納得しないでしょう？」

千冬「まぁ・・な」

志熊「前回のクラス対抗戦に出てれば良かったのでしょうが・・・そうだ、あれを使うか」

千冬「ん？あれだと？」

志熊「多分、基本スペックは今までの中で一番低いと思います。」

千冬「・・・ほう？そんな都合のいい機体があるのか？」

志熊「えぇ、と言っても今までのに比べたらですが」

千冬「まぁ、いい、今回はそれを使え」

志熊「分かりました」

そして、また波乱が来るのであった。

二人の転校生（前書き）

見直すと直せてない誤字が多いですね・・・

なるべく出さないようにします・・・多分・・・

二人の転校生

クラス対抗戦から数日後の朝のＳＨＲ・・・

真耶「今日は転校生を紹介します。
しかも二人です、それでは入ってください。」

そして入ってきた二人の特徴はまず一人目は金髪で女性のような顔立ちをしている男子である。

二人目は銀髪に眼帯で無表情である。

真耶「それでは、自己紹介をお願いします。」

？「始めまして、シャルル・デュノアといいます。
同じ男性操縦者がいると聞きまして、本国よりここＩＳ学園に転入してきました。」

（・・・男・・か・・・しかし、こいつはどう見ても・・・まぁ、俺が立ち入る事でもないだろう）

すると、クラスから悲鳴が沸き起こる。

女子Ａ「キャー！！三人目の男子！！」

女子Ｂ「しかも織斑君や赤城さんと違って守ってあげたくなるタイプ！！」

女子Ｃ「しかも、美形！！」

女子Ｄ「地球に生まれてよかった・・・」

女子Ｅ「神様、今だけあなたの感謝します！！」

女子Ｆ「ハァ・・ハァ・・・やらないか？」

志熊・一夏「「（やるってなんだよ・・・）」」

？「・・・・」

千冬「挨拶をしろ、ラウラ」

ラウラ「はい、教官」

千冬「ここではそう呼ぶな。織斑先生と呼べ。あと私はもう教官ではない」

ラウラ「了解しました。・・・ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

沈黙が少し流れ。

真耶「あの・・以上ですか？」

ラウラ「以上だ」

そっけなくラウラが言ったと思ったらいきなり。

ラウラ「・・！貴様がッ」

一夏に目が合ったラウラが一夏に近づいて一夏の頬に平手打ちをするが・・・その手首を志熊が掴み。

志熊「ほう?ドイツ人は初めて会った人間に平手をするのが礼儀なのか?」

ラウラ「くっ・・離せッ」

志熊「構わんが、一夏に危害を加えるなら・・潰すぞ・・・」

底冷えするような声で警告をするとラウラが。

ラウラ「ッ!・・私はお前を認めない!!」

そう言い残し席に着くラウラであった。

千冬　「では、ＨＲを終わる。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。各人はさっさと着替えて第二グラウンドに集合しろ。解散!」

志熊「さて・・」

千冬「赤城・織斑はデュノアの面倒を見てやれ」

志熊・一夏「はい」

シャルル「えっと、赤城さんと織斑君だよね?始めまして、僕はシャルル・・」

志熊「すまんが自己紹介は後だ・・先に移動するぞ」

そういうと三人が外に出る・・すると・・・

女子A「ああ！転校生発見！！」

女子B「しかも、織斑君達と一緒！」

女子C「金髪もいいよね！」

志熊「ちっ・・逃げるぞ・・」

女子D「逃がすか！者ども、出あえ、出あえぇぇ！！！」

一夏「・・どこの武家屋敷だよ・・・」

女子E「転校生たちいたよ！！」

女子F「あぁ、お母さん・お父さん、ありがとう・・・今年は、道端の花以外をプレゼントにするからね」

一夏・志熊「「そこはちゃんとしろ・・・」」

志熊「一夏、ショートカットするぞ」

一夏「えぇ・・あれは服が汚れるから嫌なんだよなぁ」

志熊「千冬の罰とどちらがいい？」

一夏「はぁ、わかったよ」

志熊「すまんが少し乱暴にするぞ、シャルル」

シャルル「え？」

すると志熊はシャルルを担ぎ上げて窓から飛び降りた。

シャルル「えぇぇ！！」

次に一夏が飛び降りてくる。

ちなみに志熊は普通に膝を屈めることでショックを吸収するため問題ないが、一夏は膝を屈めるうえに身体全体を転がすことでショックを地面に吸収させるという方法を使ったために制服が汚れた。

シャルル「二人ともすごいんだね・・・」

一夏「慣れればどうってことはないぜ？」

志熊「そうか？ＩＳ操縦者はこういう訓練をしてるものだと思っていたのだが」

シャル「いや、普通はしないよ・・・」

そうこうしてるうちに更衣室に着き着替える３人。

シャルル「着替えるところ見ないでね？」

一夏「？そりゃ、男の裸なんて見たいとも思わないけど、恥ずかしがるほどのもんでもないだろ？」

志熊「多分だが、身体に醜い傷跡とかがあって見せたくないのだろ

う。」

一夏「なるほどな、分かったぜ」

シャルル「ゴメンね？」

一夏「気にするなよ」

そして着替えるが・・・

一夏「シャルルって着替えるの早いんだな」

シャルル「そうかな？」

志熊「まぁ、それなりに早いと思うが」

一夏「それに、ＩＳスーツってなんか引っ掛かるんだよなぁ」

志熊「たしかに一夏のは引っ掛かるよな」

シャルル「引っ掛・・・」

志熊「シャルル、どうかしたか？（やはりこいつは・・・）」

シャルル「うぅん、なんでもないよ・・／／／」

志熊「そうか、さて・・そろそろ行かないと千冬先生のありがたくないご指導をもらう事になるぞ」

一夏「やべ、急ぐぞ！」

シャルル「う、うん」

グラウンドにて・・・

千冬「今日から本格的な実践訓練を行う！」

一同「「「はい！」」」

千冬「さて、まずは戦闘の実演を行ってもらう・・鳳・オルコット、準備をしろ。」

不満そうな顔をする二人に千冬が・・

千冬「お前たち候補生ならすぐに始められるからだ」

鈴「なんでアタシが・・・」

セシリア「わたくしじゃなくてもよろしいでしょうに・・・」

とついに不満が口にまで出ていると

千冬「お前ら少しはやる気をだせ―あいつ等にいいところを見せれるぞ？」

小声でそう二人に言うと。

鈴「まあ、アタシの実力を見せるいい機会よね！」

セシリア「そうですわね、やはりわたくしの出番ですわね！」

志熊「む？急にあいつらにやる気が出たな」

鈴「それで？相手は誰なの？セシリアが相手？」

セシリア「あら、わたくしは構いませんわよ？」

千冬「あわてるな、馬鹿ども・・相手は・・」

そう千冬が言いかけると空気を切り裂く音と真耶がこちらに突っ込んでくるのが見えた。

志熊は一夏突き飛ばす

一夏「うお、なにすんだ！？」

そう言ったときに真耶がグラウンドに突っ込んでいった・・・

真耶「いたたた・・・」

志熊「大丈夫ですか？山田先生」

真耶「は、はい～」

千冬「山田先生はああ見えて元代表候補生だったんだ。腕前はかなりのものだ」

真耶「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし・・・」

千冬「さて小娘ども、さっさと始めるぞ」

鈴「え？二対一で・・・？」

セシリア「それでは、さすがに・・・」

千冬「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

志熊「ほう、興味ありだな・・・」

そして開始される戦闘に生徒が夢中になってると

千冬「デュノア、山田先生の使ってるＩＳについて説明してみろ」

そして、シャルルが説明してるよこで一夏が

一夏「なぁ、志熊」

志熊「なんだ？」

一夏「この模擬戦は山田先生が不利じゃないか？」

志熊「普通に考えればな・・だが、鈴もセシリアも連携が出来てない。」

一夏「でも、相手は第３世代だぜ？」

志熊「そうだな、確かに連携ができなくても第３世代ならと思うがその機体の能力を十分に引き出していない。

さらに言うならあいつらはお互いに足を引っ張っているのもマイナ

スだな」

一夏「え？」

志熊「本来、鈴の甲龍は近接用ＩＳだ。
そして、セシリアは中・遠距離用機体だ。
つまりは鈴のためにセシリアは道を作るなり山田先生の機体の動きを封じるなりしなければならないはずなのだが、それができてない。
さらに、鈴は鈴でセシリアの射線に入らないようにしなければならなのだが、それが出来てない。
これではセシリアは援護も出来ないときたものだ・・・まぁ、あの様子だとセシリアは援護するつもりがないのだろうが。」

一夏「・・・あいつら我が強いからなぁ」

志熊「人間一人で出来る事などたいしてないのだがな・・・」

一夏「いや、お前のような超人が言っても説得力ねぇよ」

志熊「そうか・・・（俺は超人と思われてたのか）もう終わるぞ」

そう志熊が言うと鈴とセシリアが衝突し、そこに手榴弾のようなものを投げて二人まとめて倒された。

志熊「言った通りだろ？」

千冬「さて、これで諸君にもＩＳ学園の教師の実力がわかっただろう。以後は敬意をもって接するように」

一同「「「はい！」」」

千冬「では、織斑・赤城・オルコット・鳳・ボーデヴィッヒ・デュノアはの専用機持ちは一人づつ格グループのリーダーになれ。
他の生徒は平等に分かれろ」

すると、志熊とデュノアと一夏に集中した。

千冬「・・・馬鹿者ども！！平等にと言っただろうが！！一組から出席番号順で並べ！！さっさと別れんとグラウンド１００週させるぞ！！！」

その言葉に蜘蛛の巣を散らすように分かれた。

志熊「しかし、ボーデヴィッヒのところは通夜のような感じだな」

そして、授業は無事に終わった。

一夏「シャルル・志熊、着替えに行こうぜ？」

シャルル「い、いや、僕は機体の微調整をしてから行くから先に行っててよ。
あと時間かかるから待たなくていいからね？」

志熊「そうか、なら先に戻っている。
一夏、行くぞ」

一夏「あ、あぁ・・じゃあ、後でな」

そして昼休みに屋上にて・・・

箒「どういう事だ・・・」

一夏「ん？天気がいいから屋上で食べるって話だろ？」

箒「そうではなくてだな！」

箒が怒ってる理由は二人で食事が出来なかったからだ。

今いるメンバーは志熊・一夏・箒・鈴・セシリア・シャルルである。

一夏「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。シャルルは転校してきたばかりなんだし」

箒「そ・・それはそうだが」

シャルル「僕がここに居て大丈夫なのかな？」

志熊「気にするな、俺は気にしない」

シャルル「そ・・そうなんだ」

鈴「はい一夏。前に作ってくれって言ってたから」

一夏「おお、酢豚だ！」

タッパーに入った酢豚を一夏に渡してきた。

鈴「まあ、アタシの分を作るついでだけどね」

すると箒が弁当箱を取り出し

箒「その・・だな・・一夏、私もお前の分の弁当を用意したんだ。勘違いするな！これは時間と材料が余ったからでな・・・」

一夏「そうなんだ？でも、サンキューな、箒」

箒「おいしくはないかもしれないが、食べてみてくれ」

すると一夏がから揚げを食べた。

一夏「美味いよ、箒！なんか隠し味とかあんのか？」

箒「そうか！このから揚げには隠し味として大根おろしが入っていてな」

すると鈴が。

鈴「それよりも、一夏は酢豚食べなさいよ～」

なんて会話をしていた。

その横でセシリアが・・・

セシリア「あの・・わたくしも今日は偶々早起きをいたしまして」

志熊「む？そうなのか？」

セシリア「それで、わたくしもお弁当を作りましたので食べてはいただけませんか？」

志熊「いただこう」

外なる神になってからは毒の類などは一切効かなくなっていたために油断したのかそれとも勘が働かなかったのか、躊躇なくセシリアのサンドイッチを食べた。

志熊「パク・・モグモグ・・グフッ・・」

そのサンドイッチを食べた瞬間に志熊からとんでもない音がした。

志熊「なん・・だこれ・・は・・・」

そして、お茶を一気に飲んだ。

志熊「セシリア・・・食ってみろ」

セシリア「え？ですが・・・」

志熊「いいから食ってみろ・・・」

セシリア「パク・・・！？！？！？」

セシリアがとんでもない顔をすると紅茶を一気飲みした。

セシリア「なんでですの？本の写真のように作りましたのに・・・」

志熊「・・・材料は何を使った？」

その後は出るわ出るわのゲテモノオンパレードだった。

志熊「・・・今度から作る時は誰か呼べ」

セシリア「ですが」

志熊「いいから、言う通りにしろ。」

セシリア「はい・・・」

そして、志熊は無言でセシリアの作ったサンドイッチを食べ始めた。

セシリア「え？どうしてそんな不味いものを食べるのですか！？」

志熊「どういう形であれ、俺の事を想って作ってくれたみたいだしな」

セシリア「ですが」

志熊「俺が食いたいと思ったから食うんだ」

セシリア「志熊さん・・・／／／」

全部食べた志熊は・・・

志熊「雌伏のうちに果てるとは・・・これも戦場（いくさば）を甘く見た報いか・・・ガクッ・・・」

セシリア「志熊さん？志熊さぁーん！！」

箒「見事だった・・・」

鈴「あんたの事は忘れないわ・・・」

一夏「志熊・・・後は任せてくれ・・・」

シャルル「えっと・・・大丈夫？」

そんなこんなで昼休みは終了した。

その日の夜・・・

志熊はジャック達と連絡をとっていた。

志熊「早速だが、デュノア社の社長には息子はいるのか？」

ジャック「あの会社に何かあるのか？」

志熊「いや、なに・・今日シャルル・デュノアという奴が転校してきてな・・・」

テルミドール「なに？それが本当なら3人目の男性操縦者という事になるな」

志熊「そして、そいつはデュノア社の社長の息子らしいとの事でな・・・」

ジャック「ふむ、何かきな臭いな・・・分かった調べておく」

テルミドール「ジャック、もしかしたらあの計画が進むかもしれんぞ？」

志熊「あの計画？」

ジャック「あぁ、詳しくは説明できないが・・・」

志熊「そうか」

ジャック「明日には答えが出るはずだ」

志熊「あとはラウラ・ボーデヴィッヒについてだ」

テルミドール「そいつの資料なら確かデータベースにあったはずだ」

志熊「すぐに出せるか？」

テルミドール「内容は・・・今そちらに送った」

志熊「・・・・来たな」

ジャック「何かおもしろい内容か？」

志熊「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・ほう試験管ベビーか、それに育ちも普通とは少し違うな」

ジャック「ふむ、生まれながらにして軍人か・・しかも、ＩＳが出来てから一旦絶望を味わったな」

テルミドール「その後にチフユ・オリムラからの指導によりまた部隊最強になった・・と」

志熊「なるほどな・・（しかし、それだけでは一夏に対する憎悪が

分からんな）」

テルミドール「役にたったか？」

志熊「あぁ、ただ・・これだけだと決定打が足りない」

ジャック「決定打だと？」

志熊「あぁ、あいつはどうも千冬に対し憎悪を抱いてるみたいでな」

テルミドール「ふむ・・・どうやらそのラウラ・ボーデヴィッヒはそのチフユ・オリムラに心酔しているのではないか？」

志熊「よし、それについて調べるか」

ジャック「そう思ってもう調べておいたぞ」

志熊「手回しがいいな」

テルミドール「なるほどな・・まぁ、まだ15歳の小娘だ、分からなくはないがな」

志熊「そうだな、しかし・・その汚点のおかげでボーデヴィッヒは部隊最強になれたのだから皮肉としか言えんな」

テルミドール「まったくだ、まぁ、いい暇つぶしにはなったな」

志熊「俺は面倒がこれ以上起きない事を祈るしかないな」

ジャック「ふっ・・誰に祈るのだ？」

志熊「・・・ククク・・・確かに・・俺には祈る神も縋る悪魔もないな」

テルミドール「ククク・・そうだな」

志熊「さて、今日はここまでにしよう」

ジャック「あぁ、ではな」

テルミドール「次の会話を楽しみにしてる」

志熊「それでは切るぞ」

それから次の日の放課後訓練にて・・・

シャルル「えっとね、一夏が零治たちに勝てないのは、単純に射撃武器の特性をきちんと把握してないからだよ」

一夏「うーん・・分かってるつもりなんだけどなぁ」

シャルル「一夏はそれなり解っているけど、どちらかというと知識として知ってる感じのほうが大きいかな。あと一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く把握しなきゃ勝てないよ。特に瞬時加速は直線的だから軌道予測で攻撃できちゃうからね」

一夏「なるほどなぁ・・・」

ちなみに今までの一夏のコーチは・・・

箒「こう、ズバッとやってガキーンッって感じだ」

鈴「感覚よ？か・ん・か・く」

セシリア「左斜め２０度に身体を傾けてさらに5度上に身体を捻る感じですわ」

・・・セシリアは過ぎたるは及ばざるが如しであり。

鈴や箒はすでに教えるとかそういう問題じゃないのである。

ちなみに志熊が後でセシリアの言ったことは噛み砕いて説明をする。

一夏「（あぁ、志熊以外に分かりやすいのがきた・・・そして実戦ときもそれなりに優しいし。

志熊は実戦の時は容赦ないからな）」

志熊「どうだ？シャルルの講義は分かりやすいみたいだが」

一夏「あぁ、助かってるよ」

鈴「何よ、あんなに分かりやすく説明しているのに」

箒「そうだぞ、なぜあの説明で分からんのだ」

セシリア「わたくしは教えるのに向いてないのですね・・・」

志熊「鈴・箒、お前らは今度宿題教えるときはお前らのやってるように教えるから身を持って味わえ。

セシリアは小学生相手に説明するような感じでやってみろ。

そうすれば今よりマシになるはずだ」

一夏「俺は小学生かよ・・・」

志熊「少なくても、ＩＳに関してはそうだろ」

一夏「うっ・・・何も言い返せない・・・」

シャルル「ところで一夏の白式には後付武装が無いんだよね？」

一夏「ああ。そうみたいなんだよ。しかもセンサーリンクも無いんだよ。
拡張領域も無いみたいだし・・・」

シャルル「もしかしたらワンオフ・アビリティーに割かれてるのかもしれないね。
とりあえず、僕の射撃武器を貸すよ。
それで難しいかもしれないけど目測で撃ってみようか」

シャルルは５５口径アサルトライフル”ヴェント”を一夏に渡す。

そして１マガジン撃ち切って・・・

シャルル「撃ってみてどんな感じだった？」

一夏「なんか、早いって感じだったな」

シャルル「そう、弾丸は面積が小さいから速いんだよ。
だから、軌道さえあっていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になるんだよ」

志熊「どうだ？これで少しは射撃武器のことが分かったか？」

一夏「あぁ、前よりは分かった気がする。」

するとピットから黒いＩＳが表れた。

女子Ａ「嘘、あれってドイツの第３世代機！？まだ、トライアル中だって聞いてたけど」

するとラウラがオープンチャンネルで話しかけた。

ラウラ「おい」

一夏「なんだよ？」

ラウラ「貴様も専用気持ちだそうだな。
ならば話が早い、私と戦え」

一夏「嫌だね、理由がねぇよ」

ラウラ「貴様にはなくても私にはある」

一夏「なんだよ・・一体？」

ラウラ「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し遂げることができたのだ。
だから、私は貴様を・・貴様の存在を認めない」

一夏「そうかよ、それでも今日はやらない。

また今度な」

一夏に交戦の意思はないようだ。

ラウラ「ふん・・ならば、戦わざるを得ないようにしてやる！」

そう言ってラウラのＩＳは左肩のレールガンを発射した。

しかしそれは一夏に当たる事はなかった。

シャルル「・・こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

シャルルのＩＳが盾で防いでくれたのだ。

ラウラ「・・・貴様ッ」

志熊「昨日の事といい、今日の事といい・・貴様は随分とやってくれるな」

ラウラ「貴様は引っ込んでいてもらおうか？」

志熊「本当ならそうしてやりたいところだが、お前みたいな奴はそうもいかなくてな。
大体・・貴様らドイツ軍人は交戦の意思の無い奴に向かって問答無用で発砲するような規則でもあるのか？しかも、犯罪者でもなく軍人でもないただの一般市民に。
だとしたら、貴様らの軍はそれこそたちの悪いテロリストだな」

ラウラ「貴様ッ！訂正しろ！！」

志熊「訂正だと？ならば聞くが、軍人は無抵抗の人間に発砲するのか？」

ラウラ「クッ・・・」

志熊「貴様の行動は自分だけでなく隊の人間や戦友・・ドイツ軍すらも貶めさせた。
その事を理解することだ」

教師「そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！」

ラウラ「・・・チッ、今日は引いてやる。
次もこう上手くいくと思うなよ」

志熊「一夏・シャルル、無事か？」

一夏「あぁ、俺はシャルルが守ってくれたから問題ないけど」

シャルル「うん、僕も大丈夫だよ」

志熊「なら、今日はもう上がるぞ。
時間も時間だしな」

一夏「おう、そうだな。
あ、銃サンキュ。
色々と参考になった」

シャルル「それなら良かった。
それなら一夏達は先に着替えて戻ってて」

一夏「たまには一緒に着替えようぜ」

シャルル「い、イヤ・・・ちょっと」

志熊「一夏、昨日言った事を忘れたのか？」

一夏「あー、そうだったな・・ゴメン、シャルル」

シャルル「うん、こっちこそゴメンね？」

志熊「では、先に戻るか」

そして志熊たちが着替え終わったときに・・・

真耶「赤城くん・織斑君・デュノア君はいますか？」

志熊「シャルル以外はいます」

真耶「着替え中じゃなければ入ってもいいですか？」

志熊「えぇ、大丈夫です」

真耶「えっと、皆さんに朗報です。
今月下旬から男子も大浴場が週二回ですが使えるようになりました」

一夏「え、本当ですか？」

志熊「そんなに嬉しいか！？」

一夏「あぁ、だって今まではシャワーのみだったからな」

志熊「そんなものか」

すると戻ってきたシャルルが。

シャルル「・・・あれ、一夏たち？何してるの？」

志熊「山田先生が大浴場を使えることを知らせに来てくれたんだ」

シャルル「そうなんだ・・」

真耶「ああ、そういえば織斑君と赤城君にはもう一件用事があるんです。
二人とも専用機の正式な登録などといった書類を書いて欲しいんですが」

志熊「よし、なら行くか」

一夏「あぁ、シャルル、帰りは遅くなりそうだから先にシャワーを使っていいぞ」

シャルル「うん」

それから寮に戻るとき・・・

一夏「そうだ、今から俺の部屋に寄らないか？」

志熊「あぁ、いいぞ」

そして一夏の部屋に入って寛ぐと。

一夏「そうだ、ボディソープが無くなってたな。
ちょっと、新しいの渡してくる」

志熊「あぁ（さて、これで化けの皮が剥がれるはずだが）」

無言で帰ってくる一夏

志熊「どうした？鳩が豆鉄砲喰らったような顔をして？（まぁ、この表情が答えだな）」

一夏「シャルルが・・女だった・・」

志熊「だろうな・・・」

一夏「え？志熊は分かってたのか？」

志熊「その話はシャルルが戻ってきてから話すとするか」

そしてシャルルが入浴後に見せた姿には女性特有のふくらみがあった。

志熊「さて・・シャルル、このことについての理由を話してくれるか？もちろん嫌ならそれで構わない。
それに、言わなかったとして、俺も一夏もシャルルの正体をばらすつもりはない。」

シャルル「・・話すよ・・ううん、聞いて欲しい。」

志熊「まずはなんで男装なんかしていた？」

シャルル「それは実家・・デュノア社の社長、僕の父からの命令だったんだよ」

一夏「でも、なんで・・」

志熊「それは広告塔としてだな。
デュノア社のＩＳは確かに世界シェア第３位だが、所詮は第２世代だ。
今は第３世代に移行しつつあるからな。」

シャルル「そう、そしてデュノア社は今はまだ第３世代の目処すら立ってないんだ。
このままだと国からの支援が無くなって倒産しちゃうんだ」

一夏「え？」

志熊「ＩＳの開発は多大な費用が掛かるからな。
会社だけでやっていけるところなどそんなには無いな。（そういえば企業連は問題ないのだよな）」

シャルル「そういうこと」

一夏「でも！シャルルがやる事じゃ・・・」

志熊「愛人の娘ってやつだな・・・」

シャルル「！？・・よく分かったね。」

志熊「俺はこれでも人脈はあってな」

シャルル「僕はね・・愛人の娘でね・・その愛人、つまりは僕の母さんと二人きりで暮らしてたんだ。
でも、2年前に不治の病で他界したんだ。
それからはデュノア社に引き取られてたんだけど、そこで診断した結果ＩＳ適正が高いことが分かってね。
それからは非公式でデュノア社のテストパイロットをしてたんだよ。
」

志熊「なるほどな・・・」

シャルル「まぁ、でも・・父には数回しか会った事は無いし、言葉も2回くらいしか交わしたことないからね・・それに本妻の人には「この泥棒猫の娘が！！」って殴られるしね・・・あんなことになるならお父さんも教えてくれれば良かったのにね」

一夏「・・・」

シャルル「それから少しして経営危機になったんだ」

志熊「イグニッション・プランだな」

一夏「イグニッション・プラン？」

シャルル「うん、イグニッション・プランってのはイギリス・ドイツ・イタリアでＩＳを合同開発するってプランだよ」

志熊「今更だが、ユーロファイター・タイフーンの製造計画と似ているな」

シャルル「そのイグニッション・プランにフランスは除名されちゃってね」

志熊「過去のユーロファイター・タイフーンの時と状況が似すぎているな。
最も、今その事はどうでもいいか・・・」

シャルル「それでさっきも言ったけど広告塔と後は一夏達のデータ収集のためだね」

一夏「でも、それもばれちゃったんだろ？どうすんだよ？」

志熊「まぁ、本国に送られて牢屋行きだろうな。
会社は倒産か他企業の傘下になるかだな」

シャルル「そうだね。
話を聞いてくれてありがとう、これで少しは楽になったよ」

一夏「・・れで、いいのかよ・・」

シャルル「それでいいのかよ！！俺には親がいないし会いたいとも思わないからいい！だけど！！シャルルには父親がいる！その父親が子供を縛り付けて道具のように利用していいはずがないんだ！！」

シャルル「一夏・・・」

志熊「一夏、落ち着け」

一夏「すまない・・・そうだ！ＩＳ学園の特記事項２１項！
たしか・・本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない
本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。
つまりは3年間だ大丈夫のはずだ！その間に今後の事を考えればいい！」

シャルル「ふふ・・よくそんなの覚えていたね」

一夏「なぁ！・・志熊？」

志熊「シャルル・・お前はどうしたい？全てはお前の意思だ。」

シャルル「え？」

志熊「一夏は無条件で支えてくれるだろうが、俺はそんな優しくはないのでな。
意思の無い奴や弱い奴の相手をするつもりはない」

シャルル「・・・僕は・・僕は！自由が欲しい！！力を貸して、志熊！！」

志熊「わかった」

一夏「さて、当面の間はどうするか？」

志熊「俺たちが黙ってれば問題ないはずだが・・・早めに対策を考えるか」

コンコン・・・

志熊「誰か来たな、シャルルは布団の中に入ってろ」

一夏「今出ますよーっと、セシリア？」

セシリア「あの、志熊さんは居りますか？」

志熊「どうした？」

セシリア「いえ、夕食をご一緒したいと思いまして」

志熊「そうか、っと箒はなんの用だ？」

箒「あぁ、一夏と一緒に夕餉をと思ってな」

一夏「んー、でもシャルルが風邪引いたからなぁ」

シャルル「ゴホ・・ゴホ・・二人とも行ってきていいよ。ごゆっくり～」

志熊「そうか、それなら行くか」

夕食後・・・

志熊「一夏、シャルルに夕食を持っていってやれ」

一夏「ん？志熊はどうするんだ？」

志熊「俺は部屋でやる事を思い出したのでな」

一夏「分かった」

志熊「ではな」

一夏「あぁ、また明日な」

その後一夏がシャルルに御飯をあーんして食べさせてあげたとか・・・

そのころ、志熊の部屋では・・・

志熊「シャルル・・いや、シャルロットについてはこちらの予想通りだった。」

ジャック「そうか、すまんがあいつがその件で動いてくれてるからあいつに話してくれ」

志熊「あの爺さんか・・」

ジャック「あぁ、頼んだぞ」

志熊「了解だ・・・もしもし、王小龍か？」

王「どうかしのか？」

志熊「デュノアの事でな」

王「進展があったのか？

志熊「あぁ、予想通りのな」

王「それで？」

志熊「こちら側についた」

王「上出来だ」

志熊「後は・・・あの社長か・・・」

王「あれは昔の私と同じ匂いがするのでな・・・」

志熊「なら、割と容易いな」

王「そうか」

志熊「にしても、ＢＦＦの重鎮に任せていいのか？」

王「私では不満か？」

志熊「そうではない、ただ・・これは企業連という組織の問題であってその参加企業の事ではないのだぞ？」

王「なに、我々は皆家族だ。
その家族のために尽力を尽くすのは当然の事だ」

志熊「そうか、爺さん、頼りにさせてもらう」

王「あぁ、任されよ」

志熊「それでは、失礼する」

王「身体には気をつけろよ？おやすみ」

志熊「そっちこそな、おやすみ・・・・・さて、布陣は整った。どうでる？」

それから数日後の放課後・・・

アリーナへ向かう途中・・・

女子Ａ「なんか今、第３アリーナで模擬戦やってるみたいよ？」

志熊「ちょっといいか？」

女子Ｂ「なに？」

志熊「模擬戦は誰が戦っている？」

女子Ａ「たしか・・ボーデヴィッヒさんとオルコットさんと鳳さんかな」

志熊「そうか、ありがとう」

そして向かった先で見たものは一方的な蹂躙であった。

鈴のＩＳを殴り飛ばしセシリアのＩＳを蹴り上げる。

その様子に志熊は友を傷つけられ・・そして・・・

志熊「そうか・・・そんなに俺を怒らせたいか・・・いいだろう・・少し痛い目でも見てもらうか。
ただし、ＩＳよりも遥かに強力なチカラでな・・・外なる神の１柱を怒らせたことを後悔させてやる」

そう言って出てきた赤城は生身のままであった。

ラウラ「どうした？これで終わりか？無様だな・・ハハハハ・・・・・」

志熊「・・・おい、次は俺が相手になってやる・・・構えろ・・・」

ラウラ「！・・・ククク・・貴様か・・相手になってやる。
さっさとＩＳを展開しろ」

志熊「その必要はない・・・俺はこのままで貴様を倒す」

ラウラ「ふん、どうなっても知らんぞ！」

今、ラウラは勘違いをしていた。

なぜなら志熊の発する気を感じ取る事が出来なかったからだ。

つまりは志熊のことを弱い奴と勘違いしたのだ。

だが、実際はそうではない・・その気はすでに人間が感じ取れる領域の遥か外側にあるのだ・・・
殺気も怒気も大きすぎるのだ。

そしてラウラが動く瞬間には志熊はラウラの腹部に拳を撃ち込み吹き飛ばした。

そして吹き飛んだラウラは一瞬にしてアリーナにめり込んだ。

ラウラ「ガッ！！」

この時にラウラはこの異常な状態に気がついた。

ラウラ「（ナンダコレハ・・・・コンナノ・・・・ニンゲンジャナイ・・・・ナンダ・・・・コイツハ・・・・マルデ・・・・）ハカイ・・・・シン・・・・」

志熊「・・・・違うな・・・・俺は外なる神・・・・お前らで言う・・邪神だ」

ラウラ「あ・あ・・あ・・・・あああああアアアアアＡＡＡＡＡＡＡａａａａａａａａ！！！！！」

志熊「所詮はこの程度・・・・か・・・・さて、後は織斑先生に任せるか・・・・今日の事は記憶からも無くなるだろうしな」

ラウラは叫んだ後に意識を失った。

その夜・・・・

千冬「貴様！！何をした！！！」

志熊「あぁ、セシリア達を助けただけだ」

千冬「人間の記憶無くなるほどの行動の何が人助けだ！！」

志熊「やはり・・今日の記憶は無くなったか・・・」

千冬「なぜだ・・・なぜこんな事をした・・・」

志熊「まぁ、記憶が無くなったのはＩＳの武器の中でも衝撃が強い武器をある程度リミッターを弱めた上で使ったからな」

千冬「本当だろうな？」

志熊「あぁ、本当だ（嘘だがな・・まぁ、カメラ等の機材も騙したから問題はないか）」

千冬「それで、どうしてこんな事をした？」

志熊「これを見ろ・・・」

千冬「・・・これは！」

志熊「そうだ、ラウラだ・・・笑みを浮かべながら二人をいたぶる姿だ」

千冬「ラウラが首まで絞めて・・・」

志熊「あいつは千冬・・お前に心酔し、一夏とこのＩＳ学園に憎悪を持っている」

千冬「そ・・んな・・・」

志熊「しかし・・事実だ」

千冬「あ・・あぁ・・私はどうすればいい？私は・・私は・・・育て方を間違ったのか？」

志熊「・・・どうだろうな・・・」

千冬「私は・・・志熊・・・お願いだ、ラウラを・・・私とラウラを助けてくれ・・・」

そう力なく服を掴む千冬・・・

志熊「・・・途中までは助けてやる・・・が、最後は自分自身でラウラを救うんだ。
それがお前の救いになる・・・まぁ、今はこうしててやる・・・」

そう言って千冬を抱きしめる志熊・・・そこには無言で志熊の胸に顔を埋める千冬の姿があった。

それから次の日・・・・

女子達「「「赤城さん、私と組んでください」」」

志熊「（そういえば・・・今回はタッグマッチだったな）すまんが、俺は無理だ」

女子達「「「え～」」」

志熊「俺が組んだチームは確実に優勝してしまうからな、だから俺だけは一人なんだ。

それは学園からの正式な通達だ」

女子A「なぁ～んだ、そうだったの・・・まぁ、誰かに組まれるよりはマシかぁ」

そして去っていく女子・・・その後教室の前の廊下で合流してから教室し入ると

女子B「ねぇ、今月の学年別トーナメントに優勝すると赤城さんと織斑君のうちどちらかと・・・」

志熊「俺たちがどうかしたか？」

女子C「うぅん！なんでもないよ！」

そう言って解散する女子達と頭を抱えて唸る箒がいた。

箒「どうしてこうなった・・・」

寮の廊下の前で大声で付き合うだのどうのって約束をすれば噂になるのは当然である。

そして、学年別トーナメントが始まる・・・・

学年別トーナメントと救済する邪神（前書き）

前回のはちょっと修正しました。

まぁ、そんなに支障が出る部分ではなかったのですが・・・

うーん・・・年末年始特別の話とか書こうか迷いますね。

まぁ、書いたら読んでみてください。

学年別トーナメントと救済する邪神

学年別クラストーナメント当日・・・

一夏「まさか、対戦相手の発表が今日とは」

志熊「確か、抽選のための機械が故障していたのだったな」

箒「発表されたぞ」

第一試合・・織斑一夏・シャルル・デュノアペア対赤城志熊

志熊「さて、行くとするか」

そしてアリーナ内にて・・・

一夏「悪いが、勝つのは俺達だ！」

シャルル「そういうこと！負けても恨まないでね？」

志熊「そうか・・ならば、持てる力の全てを見せてみろ！お前らのその覚悟と共に！！」

そして始まる戦い、ネームレス・アバターが化身としてなった機体はＲＰＴ－００７Ｋ－Ｐ２量産型ゲシュペンスト改の黒バージョンである。

一夏「シャルル！援護を頼む！」

シャルル「任せて！」

シャルルがアサルトライフルで志熊の退路を塞ぐように援護している。

志熊「なるほど、悪くない」

一夏「おぉぉぉぉ！！」

一夏が志熊に切りかかるが・・・

志熊「甘いな。」

一夏の切るタイミングを崩すために少し身を引いてすぐに前進する。

一夏「なっ！」

そのまま左腕に装着されてるプラズマバックラーを一夏の腹部に叩き込み、電撃を纏わせた3連パイルバンカーを撃ち込んだ。

一夏「ぐおっ！」

さらに一夏を救出するためにアサルトライフルを撃つシャルルだったが、志熊は一夏を盾にして防いだ。

シャルル「なっ！」

志熊「隙だらけだ」

そう言ってフォトンライフルを呼び出してシャルルに撃ち込んだ。

シャルル「うあ！」

さらに志熊はよろけたシャルルに一夏を投げた。

二人はぶつかりバランスを崩して倒れた。

志熊「これで終わりだ」

そう言ってレクタングルランチャーを取り出し発射した。

一夏「まだだぁぁぁぁ！」

ドゴォォォン！！

煙の中から一夏が瞬間加速を使い出てきた。

一夏「オオオオオオ！！」

ガギィィィン！！

一夏の雪平弐型と志熊のプラズマバックラーがぶつかる。

志熊「やるな（まさか、土壇場とはいえランチャーの弾を切るとは、こいつの成長が楽しみだ）」

一夏「甘いな」

一夏がニヤリと笑う、そこにシャルルが

シャルル「これが僕のＩＳ、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？の最高攻撃力兵器だよ！！」

そう言うとラファール・リヴァイヴ・カスタム？のシールドが弾け飛びパイルバンカーが出てきた。

六十九口径回転式パイルバンカー、グレースケール・・通称”シールド・ピアース”

その威力は第２世代ＩＳ最高威力の兵器であり、第３世代下手な第３世代の武装をも超える威力である。

志熊「ほう・・考えたな、だが・・それでもまだ足りん！」

そう言うと突っ込んできたシャルルは異変に気付いた。

すると一夏とシャルルの位置に無数のミサイルが落ちてきた。

志熊「スプリットミサイル・・所謂分裂ミサイルだ」

そう、一夏達が気付かぬ間に背中に装備されてるスプリットミサイルをご丁寧に着弾指定で飛ばしたのだ。

つまりは一夏達はロックされてないから気付くことがなかったのだ。

そして飛ばした数は２発・・一発に６発入ってるのだから合計１２発が二人に直撃した。

そのミサイルで志熊の勝利が決まった。

一夏「くそ～」

シャルル「悔しいね」

志熊「おつかれ、一夏は強くなったな」

一夏「そうかな？」

志熊「あぁ、強くなった」

一夏「次はもっと強くなる！」

シャルル「僕も頑張るよ」

志熊「あぁ、応援してる。
もっとも、負けるつもりは毛頭ないが」

そして一回戦が順調に進んでるので志熊はジャック達に会っていた。

ジャック「おつかれ」

テルミドール「イチカ・オリムラと言ったか、奴は伸びるな」

志熊「フッ・・そうだな、教えていてこちらが楽しくなるほどだ」

テルミドール「いつかＯＲＣＡに入れるか検討するか」

志熊「まぁ、あいつがいいと言ったらな」

ジャック「無理強いはさせないさ」

テルミドール「なんだ？私が無理強いするとでも思ったのか？」

ジャック「さて、どうだろうな？」

テルミドール「フン・・」

・・・それから少し経ち・・・

志熊「それでは行って来る」

テルミドール「やりすぎるなよ？」

志熊「あぁ」

そして志熊が去って行った後・・・

ジャック「さて、テルミドール・・・これはどうする・・・」

テルミドール「これは志熊に相談したくはないしな・・・」

二人で肩を落とす・・・そこにはとある女性の写真があった・・・

そうお見合い写真である・・・

ジャック「よし、後でＩＳ学園のゴミ箱に捨てるぞ」

テルミドール「・・・ばれない事を祈るか」

アリーナ内・・・

赤城志熊対ラウラ・ボーデヴィッヒ、篠乃之箒チーム

ラウラ「逃げずに来たか、まぁ・・貴様のような雑魚は私がすぐに叩き潰してやる。
イギリスや中国の雑魚と同じようにな・・・あぁ、後はあの男も私が消しておくから安心しろ。
貴様も言いたい事があれば言うといい、ＩＳ学園最後の台詞として聞いてやる。」

（やはり、完全に記憶が無くっているようだな。
しかも、本能も忘れてるみたいだな・・・まぁ、いい）

志熊「小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする準備はＯＫ？・・・・
さぁ、豚の様な悲鳴を上げろ・・・！」

そして始まる戦い・・・

志熊の使用機体はＭＢＦ－Ｐ０１－Ｒｅ０２アストレイゴールドフレーム天ミナ

箒「漆黒の天使・・・」

その姿は装甲が黒く間接が金に輝く機体であり、右腕に盾とボウガンが合体したような姿の武器がある。

ラウラ「堕ちろ！」

そう言ってレールガンを撃つが志熊は難なく回避し、右腕に装備している武器功盾システムトリケロス改からビームを撃つ。

ラウラ「ちっ・・ビームか・・」

ラウラが舌打ちした理由はビームにＡＩＣと呼ばれる慣性停止結界が使えないからだ。

志熊「さて、次は避けれ・・」

箒「私を忘れてもらっては困る！」

そう言って切りかかるが、トリケロス改からビーム刃が出てきて箒の打鉄の剣を受け止めた。

さらに腰に装備してるレイピアの様な実体剣、トツカノツルギを右肩の関節に突き刺した。

箒「ぐあっ！」

さらに引き抜いたときに箒が宙を舞った。

そのまま地面に激突した。

箒「何をする！」

志熊「一応助けるのか？」

ラウラ「ふん、邪魔だから退かしただけだ」

志熊「だろうな・・・」

そして腰から射出したワイヤーブレード（ペンデュラムが近い）で攻撃してきた。

志熊「ほう、誘導するのか」

そう言うと2基のワイヤーブレードをトリケロス改のビームライフルで撃ち落した。

さらにトリケロスに搭載されてる長い杭のような武器、トリケロスを発射した。

ラウラ「甘い！」

それをＡＩＣで受け止めた。

それが隙になりその間に箒の打鉄に向けてワイヤーブレード、マガノシラホコを撃ち込んだ。

箒「グッ・・」

それを打鉄の腰に刺さりそのままこちらに引き寄せ一閃した。

箒「あぐ・・」

志熊「これで終了だ」

引き寄せた打鉄にツムハノタチで斬りつけて止めを刺した。

箒「くそ・・・（私にも専用機があれば・・）」

そこにラウラのレールガンが飛んでくる。
それをトリケロスで防ぐ。
志熊「貴様、どういうつもりだ？」
ラウラ「ふん、そこにいる貴様が悪い」
志熊「そうだとしても、俺が避ければ箒がどうなるか分からん貴様でもないだろ？」
ラウラ「だからどうした？こんな屑がどうなろうと私の知った事ではない」
志熊「・・・そうか、貴様・・もう軍人を名乗るな」
ラウラ「何？」
志熊「軍人を名乗るなと言った。
俺は貴様の様な軍人は認めん・・・」
ラウラ「ふん、貴様を捻じ伏せて認めさせてくれる・・・私の力を思い知れ！」
そう言うとレールガンを発射しようとしたが突然ラウラのＩＳのレールガンが爆発した。
ラウラ「なっ！」
志熊「それで？」

ラウラ「貴様！どうやって！？」

志熊「教えると思うか？間抜けが」

ラウラ「貴様あぁぁぁ！！」

ラウラはワイヤーブレードを2基射出した。

それを軽々と避ける。

ラウラ「消えろぉぉぉぉ！！」

志熊「ならば、望みどおりに・・・」

そう言うと志熊の姿が消えた。

ラウラ「なっ！どこだ！？どこに消えた！？」

志熊「貴様が消えろと言ったから消えたのだが？」

ラウラ「貴様！出て来い！！」

ゴールドフレーム天ミナの装備の中にミラージュコロイドというレーダーから消え、さらに機体を見えなくするという能力である。

さらにゴールドフレーム天ミナにはミラージュコロイドの弱点たる熱紋や電磁センサーからの秘匿が不可能という弱点まで消えているために完璧なステルスとなっている。

そのころモニタールームでは・・・

真耶「織斑先生！レーダーでもセンサーでも探知できません！」

千冬「なに？・・・なんという能力の機体を使ったんだ・・・」

志熊「さて、これで終わりだ」

そう言った瞬間シュヴァルツィア・レーゲンが放電を始めた。

ラウラ「なんだ！一体何が起こっている！？」

志熊「マガノイクタチ・・・」

マガノイクタチ・・・コロイド技術を応用した試作非殺兵器。

背部に装備された翼状のデバイスを敵機に接触させ、敵機内に送り込んだコロイド粒子によって敵機と自機を擬似的に連結。

バッテリーを強制放電させ自機のエネルギーとして吸収できる。

設計段階では自機の周辺にコロイドを展開し、そのエリアに踏み込んだ敵機全てを対象にバッテリーを強制放電させるはずだったが、コロイドを空間に展開するのは機体表面に定着させるのと違いロストする量が多すぎて正常に作動しなかった為、現在の敵機に直接接触してエネルギーを吸収する仕様に変更された。

のちに触れずとも、強制的に放電できるようになった。

そして、その触れずとも放電できる使用になったのがゴールドフレ

ーム天ミナである

ラウラ「ふざけるな！動けないだと！？」

さらに志熊は翼状のデバイスを正面に展開してクワガタの鋏のように使用して挟んでいる。

ラウラ「・・・わたしは・・負けるのか・・・？」

すると、何処からかラウラに声が聞こえてきた。

？「・・力が欲しいか？」

ラウラ「（・・あぁ、欲しい）」

？「・・比類無き力が欲しいか？」

ラウラ「（寄越せ・・）比類なき力を！」

Ｄａｍａｇｅ　Ｌｅｖｅｌ・・・Ｄ
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎ・・・Ｕｐｌｉｆｔ
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｉｔｉｏｎ・・・Ｃｌｅａｒ

・・・Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ・・・ｂｏｏｔ.

ラウラ「あああああああ！！」

志熊「ちっ・・あれは・・む？通信だと？」

ジャック「聞こえるか？」

志熊「あぁ、なんだ？」

ジャック「あれはＶＴシステムだ」

志熊「まさか、ヴァルキリー・トレースシステムだったか？」

ジャック「そうだ、あれは過去のモント・グロッソにおける総合優勝者のデータが使われている。」

志熊「しかし、あれはアラスカ条約で使用も研究も禁止ではなかったか？」

ジャック「そうだ・・あと、試合は中止になった。」

志熊「・・・そうか、だが・・この戦いだけは譲れんのでな」

ジャック「そうか・・通信を切るぞ」

志熊「あぁ・・（さて、あれは多分、千冬のデータだな）む？一夏、どうした？」

一夏「あいつ！ぶっ飛ばしてやる！！」

志熊「落ち着け」

一夏「ふざけんな！志熊！止めるな！！」

ガスッ！！

一夏「ガッ！！」

一夏を殴る志熊。

志熊「落ち着けと言っているだろ？」

一夏「あ、あぁ・・」

志熊「それで？何があった？」

一夏「あれは・・あのデータは千冬姉だけのものなんだ・・・それにあんな力に手を出したラウラも許せねぇ・・・」

志熊「そうか、だが・・この戦いは譲れないのでな・・・」

一夏「どうしてだ！？」

志熊「俺が・・頼まれたからだ・・・助けてくれと・・・」

一夏「誰にだよ？」

志熊「千冬だ・・・」

一夏「！？」

志熊「千冬に・・千冬とラウラを助けてくれと・・・故に・・この戦いは譲れん！」

一夏「分かった・・・だが絶対に勝って二人を救ってくれ！！」

志熊「あぁ、俺は必ずあいつ等を助ける」

そして、志熊はラウラのＩＳに突撃した。

志熊「にしても・・ＶＴシステムを使用するとここまでＩＳが変化するのか・・・」

そう、今やラウラのＩＳは元の面影を一切残さずに変化したのだ。

まるで黒い戦乙女のように・・・

志熊「不細工な代物だな・・・お前はそんな殻が欲しいのか？なぁ、ラウラ・ボーデヴィッヒ？」

アリーナに佇むのは黒い戦乙女と漆黒の天使・・・

志熊「往くぞ！」

戦乙女が志熊を袈裟斬りにしようとするがそれよりも早く志熊は懐に潜り込みトリケロス改のビーム刃で戦乙女の右腕を切り落とした。

さらにツムハノタチで戦乙女の胴を切り開いた。

そこから弱々しい表情をしたラウラが出てきた・・・その姿は助けを求めるような・・・そんな姿で・・・

ラウラ「（・・・強さとはなんだ？・・・私の求めてる強さとは？）」

志熊「（強さか、それは人それぞれだろうな）」

ラウラ「（・・なに？・・そうなのか？）」

志熊「（そうだ、しかし・・強い奴らは皆己自身を理解し、納得して決して自分を裏切らないという共通点はあるが）」

ラウラ「（・・・そうか・・・）」

志熊「（とりあえずはやりたい事でも見つければいいのではないか？）」

ラウラ「（・・・やりたい事だと？）」

志熊「（あぁ、人生などやりたい事をやったもの勝ちだしな）」

ラウラ「（・・では・・お前は何故強い？・・何故強く在ろうとする？・・どうして強い？）」

志熊「（俺は別に強いわけではない）」

ラウラ「（・・・お前が強くない？）」

志熊「（あぁ・・強くは無い）」

ラウラ「（・・・あんなに凄い力を持ってるのにか？）」

志熊「（力は所詮力でしかない。
そうだな、勘違いしてる奴も多いからお前にも教えるが、力はあくまで己自身が使う道具のようなものだ。

強さとは別のところにある。）」

ラウラ「（・・・それで、お前は強くないと？）」

志熊「（あぁ、俺は強いわけではなく我が儘に過ごしてるだけだ。
俺自身が後悔しないようにな）」

ラウラ「（・・わたしは強くなれるだろうか？）」

志熊「（なれるかどうかではなく、なるかならないかだ）」

ラウラ「（・・・そうか）」

志熊「（とりあえずはやりたい事でも見つけろ。
そうすれば自分が見えてくるのではないか？自分を理解し納得する
のはその後だ。
そして、強くなるのもな）」

ラウラ「（・・・あぁ、しかし・・不安なんだ）」

志熊「（なに、普通は誰もが不安だ。
まぁ、俺がお前を支えてやるから安心しろ）」

ラウラ「（そうか・・ありがとう・・・）」

ラウラ「（眩しいな、それに暖かい。
わたしはあいつみたいに強くなりたい・・そうあいつみたいに・・・
そして、認めてもらいたい。
私にはこの気持ちは分からないけど・・・これがきっと・・・”恋
”なのだろう・・・）」

騒ぎから数時間後・・・

ラウラ「・・・一体何が・・・起きた？・・・グッ・・」

千冬「目を覚ましたか・・あまり動くなよ？全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。
まぁ、しばらくは動けないだろう。」

ラウラ「ここは何処ですか？一体何が起こったのですか？」

千冬「ここは医務室だ。
そしてお前は・・これは重要案件であり極秘事項なのだが・・・ＶＴシステムは知ってるな？」

ラウラ「はい・・・」

千冬「それがお前のＩＳに搭載されていた。
巧妙に隠されてはいたがな。
操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志・・・・いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。
現在学園はドイツ軍に問い合わせている。
近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

ラウラ「私が・・・望んだからですね・・・」

千冬「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

ラウラ「はっ、はい！」

千冬「お前は誰だ？」

ラウラ「わたしは・・・わたしは・・・（ラウラ・ボーデヴィッヒ・・そんなのはただの記号だ。
ならば・・私は誰なんだ？）」

千冬「誰でもないのなら、ちょうどいい。
お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。
なに、時間は山のようにあるぞ。
なにせ三年間はこの学園に在籍しなければならないからな。
その後も、まあ死ぬまで時間はある。
たっぷり悩めよ、小娘」

ラウラ「あ・・・・・」

千冬「ああ、それから、お前は私にはなれない。
私がお前になれないようにな」

そう言って出て行った千冬・・残されたラウラは一人で泣きながら
笑っていた。」

夜の寮の庭にて・・・

千冬「ありがとう」

志熊「む？」

千冬「私達を救ってくれて感謝している」

志熊「あぁ」

千冬「なぁ？お前はどうしてそんなに強いんだ？」

志熊「お前もそれを聞くのか？」

千冬「私は強くなったと思っていた。
だが、実際はそうではなかった・・・お前の強さを教えてくれ」

志熊「なに、強さってほどのものではない。
ただ、俺は我が儘なだけだ。」

千冬「我が儘？」

志熊「そうだ、俺は我が儘な過ごし方をしてるだけだ。
俺が後悔しないようにな・・・」

千冬「そうか、お前は自分自身に素直なんだな」

志熊「まぁな」

千冬「ならば、私も少し素直になるとしようか」

志熊「そうか」

そう言って千冬は志熊の腕に自分の腕を絡めて密着してきた。

志熊「どうかしたか？」

千冬「なに、素直になろうと言っただろう？私はお前とこうしたいと思ったから腕を組んだんだぞ？」

志熊「そうか、まぁ・・構わんが」

千冬「そうか、ありがとう」

腕を組んでるときの千冬の顔は少し紅くなっていた。

その日の夜自室にて・・・

王「私らの計画を明日行うのだが、お前の力を借りたい。」

志熊「構わん」

王「そうか、詳細をそっちに送るぞ」

志熊「爺さん・・・やはりこれか・・・」

王「気付いておったのか？」

志熊「まぁ、な」

王「場所はＩＳ学園の応接室で行うのだが・・彼女を連れてきてくれないか？」

志熊「あぁ、構わんが・・同席させるのか？」

王「いや、こう言ってはなんだが・・彼女は切り札だ」

志熊「なるほどな・・・俺はどうする？」

王「お前には同席してもらう」

志熊「何故だ？」

王「お前には交渉の場でのボディーガードになって欲しいのだよ」

志熊「了解だ」

王「よろしく頼むぞ」

志熊「そういえば、面子はどうなっている？」

王「私とジャック・Oだ」

志熊「分かった」

王「それでは明日は頼むぞ？」

志熊「あぁ、任された」

その日に一夏はシャルルと風呂に入ったとかなんとか・・・・

次の日・・・

応接室には7人の人間がいた。

千冬「始めまして、私がＩＳ学園の警備主任織斑千冬です。」

ジャック「こちらこそ、私が企業連最高議長ジャック・Ｏだ。
こちらは企業連役員兼ＢＦＦ代表の王小龍（ワン・シャオロン）だ」

王「はじめまして、私が紹介にあずかった王小龍だ」

そして、向かいに座ってるブロンドの若い感じのする紳士が自己紹介した。

？「はじめまして、私はデュノア社代表取締役ヴァン・デュノアと申します。
こちらが秘書でそっちにいるのがボディーガードです。」

同じく挨拶をする秘書とボディーガード

志熊「企業連ボディーガード役の赤城志熊です。
よろしくお願いします。」

ジャック「早速だが、デュノア社は企業連に参加したいとの事だが。」

ヴァン「はい、私共デュノア社は企業連のＩＳ部門に参加したいと思います」

王「それで？どんなメリット私共にどんなメリットがある？」

ヴァン「まずはわが社のＩＳラファール・リヴァイヴは世界第3位のシェアを誇りライセンス生産もされているほどのものです。
その技術とノウハウを企業連でも生かせればと思っております。」

ジャック「だが、未だに第3世代ＩＳの目処がたっていないようだが？」

ヴァン「それは企業連に参加し、他企業と切磋琢磨すればすぐにでも開発できると思っております」

ジャック「そうか、話は変わるがこの学園にそちらのご子息がいるようだな？」

ヴァン「はい、シャルルと申します」

ジャック「ふむ、世界で3人目のＩＳ操縦者だったか？」

ヴァン「そうです。
それがどうかしましたか？」

王「しかし、こちらの情報だとご子息は確認できてないのだが？」

ヴァン「それは一体どうことですか？」

王「こちらの知る限りデュノア社長には息子ではなく娘ではなかったか？」

ヴァン「それは何かの間違いでしょう？」

王「そうか、しかし・・それがバレればタダではすまんぞ？」

ヴァン「仰ってる意味が分かりかねますが」

王「・・・そうか、ならば・・・入ってきてくれたまえ」

がちゃ・・・

ヴァン「！！」

シャルル「・・・おとうさん・・ごめんなさい・・でも、もう・・・嘘を付きたくないよ」

王「これはどういう事か？」

ヴァン「シャルロット！！」

シャルロット「・・ビクッ！！」

王「ほう、やはりシャルロット嬢だったか」

ヴァン「・・・お願いします・・・シャルロットの事はシャルロットの事だけは黙っていてやって下さい・・・」

そう言って土下座をする社長・・・

ジャック「フランス政府に連絡を・・・」

ヴァン「！！・・・私はどうなっても構いません！ですが・・・娘と従業員は助けて下さい・・・」

ジャック「君がどうこうしようが普通に考えれば無理に決まっているだろう？」

ヴァン「そこをなんとか！」

すると秘書とボディーガードが共に土下座をしながら

秘書・ボディーガード「「シャルロットお嬢様だけでもお願いします！！」」

ヴァン「君達・・・」

王「理由を聞こうか・・・」

ヴァン「はい・・・シャルロットは私と愛人・・・いえ、将来妻となるはずだった女性との間に生まれた娘です。
私はその女性・・・フランシーヌとは愛し合っていました。
ですが、ある日シャルロットを身篭った時に一族の計略により私たちの中は引き裂かれました。
酷いものでしたよ・・・気付けば別の財団の女性と勝手に婚姻させられてたのですから・・・その時私は駆け落ちでもしようかと思ってたのですが、従業員達を盾にされて逃げる事もできなくしてきました。
それから一族は私にフランシーヌとシャルロットに二度と会わない代わりにこの事は不問にすると言ってきたのです・・・それからはシャルロットも知ってる通り僅かに仕送りをする以外できなくなってしまって・・・その後・・フランシーヌは不治の病に掛かり他界・・・その後はシャルロットを引き取る
ことになったのですが・・これもまた酷いものでね・・・一族や妻、財団からは娘に会うな・・と。
会えば従業員の解雇と娘を社会的に抹殺するとまで言われまして・・・フランシーヌが死にそうな時も傍にいてやれず、シャルロットに父親らしいこともしてやれなかった・・・だから・・・せめて、3年間はだけでもいいから今よりもいい生活をと思って・・・」

王「それで、ＩＳ学園に転入させたと？」

ヴァン「はい・・・フッ・・・最低の父親ですね・・・僕は・・・本当に最低だ・・・」

王「君は今の会社に未練はあるかね？」

ヴァン「それはもちろん・・・従業員の事もありますし・・・」

王「ならば・・・娘と従業員がなんとかなるなら会社自体には未練は無いのだな？」

ヴァン「はい・・・それが？」

王「ならば、今の会社からその従業員共々こっちに来い」

ヴァン「え？」

王「つまりは引き抜きって奴だ。
調べてみるとデュノア社はその財団やデュノア一族の者達の勢力と君の勢力で真っ二つになっているそうじゃないか？」

ヴァン「そこまで知っているんですね？」

王「あぁ、それに優秀でいて人間性もいい人間は皆君の側みたいだしな。」

ヴァン「当然ですよ、みんな僕の家族みたいなものですから。
ですが、それが何故引き抜きに？」

ジャック「それは私が説明しよう。
今回企業連は新しく会社を立ち上げようと思っていたのだよ。
それもＩＳの会社を。
しかし、その会社で舵取りをしてくれる人物がいない・・まぁ、いるにはいるがその人達も自分の会社に勤めていたいと言っていてな、それならと思っていたときに君の会社に白羽の矢が刺さったというわけだ。
それに君の下についてる社員は皆優秀だと知っているからな。
今の状態も多分財団側の圧力のせいであってそれが無ければ今頃第３世代機も作れていただろうな。
そんな優秀な人材は是非とも欲しいというわけだ。」

ヴァン「ですが、僕は罪を犯しました。」

王「それについては問題ない。
フランス政府はすでに丸め込んである。
それに君はその新しい会社でも社長をしてもらおうと思ってる」

ヴァン「！！」

ジャック「これだけ優秀な人物だ。
然るべきポストに据えるというものだ。
もちろんシャルロット嬢にについても大丈夫だ。
どうかね？悪い話じゃないと思うが？」

ヴァン「従業員を説得したいので何日か待っていただけますか？」

ジャック「あぁ、それでは3日後に返事をくれ」

ヴァン「分かりました。それでは失礼します」

その後校門にて・・・

ヴァン「今までつらい思いをさせて辛かったね？本当にすまない！！」

シャルロット「僕はもう大丈夫だよ。
おとうさん、これから二人でやり直そう？」

ヴァン「！！・・あぁ・・もちろんだ。」

そのころ応接室では・・・

志熊「なるほど、人助けがしたかったのか・・・」

ジャック「違うさ、結果的に助かった人がいるだけだ」

志熊「だろうな・・言ってみただけだ」

ジャック「もっとも、小龍は本気だったのかもしれんが・・・」

志熊「違いない、あの好々爺はな」

それから3日後に社長を含め会社全体から３５％もの従業員がデュノア社を退職したようだ。

そして、新しい会社の名前はエムロードと名づけられた。

ちなみにデュノア社の件はニュースになっていた。

そしてクラス別トーナメントから数日後・・・・

真耶「今日はですね・・・転校生を紹介します・・・転校生といいますが、すでに紹介は終わってたりしてまして・・・ええと・・とりあえず入ってきて下さい。」

？「失礼します」

？「シャルロット・デュノアです。
皆さん改めてよろしくお願いします。」

真耶「デュノア君はデュノアさんということでした・・・」

女子A「え？デュノア君って女・・・？」

女子B「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

女子C「って、織斑君、同室なんだからまさか知らないってことは・・・」

女子D「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

するとドアが勢いよく開かれ・・・

鈴「一夏ぁ！！」

鈴が怒鳴り込んできて・・・

鈴「死ねぇぇ！」

ＩＳを展開し、一夏に発射する。

一夏「あ、俺はこれで死んだな・・・」

しかし衝撃砲がいつまでたっても当たらないので目を開けるとラウラがＡＩＣで止めてた。

一夏「あれ？生きてる？って・・ラウラ？」

ラウラ「織斑一夏、あの時はすまなかった。」

一夏「あぁ、その事なら気にしてねぇよ。
あと俺のことは一夏でいいぜ？改めてこれからよろしくな、ラウラ」

ラウラ「あぁ、こちらこそよろしく頼む」

そこで終わればよかったのだが・・

ラウラ「志熊！」

志熊「ん？何か用か？」

ラウラ「あぁ」

そう言ってラウラは顔を近づけるが・・

サッ・・

ラウラ「む・・」

サッ・・

ラウラ「むぅ・・」

サッ・・

ラウラ「・・・」

サッ・・

ラウラ「避けるな！」

志熊「断る。
何か面倒な事になりそうなのでな・・・」

ラウラ「むぅ・・・グスッ・・」

志熊「・・・（避けても面倒な事になったな・・・）分かった避けんからさっさとしろ」

ラウラ「うむ！」

そして志熊みキスをするラウラ・・・

ラウラ「お前は今日からわたしの嫁だ！！これは決定事項だ！！異論は認めん！！」

志熊「嫁だと？婿の間違いだ」

ラウラ「日本では気に入った相手を嫁にするというのが一般的な習わしだと聞いた。
故に、お前を私の嫁にする」

志熊「・・・一夏、すまんが救援を・・」

そこには一夏の姿は無かった・・・

さらに目の前をビームが通り過ぎた。

セシリア「志熊さん？どういう事かきっちり説明してくださいね？今すぐに・・ね？」

志熊「・・・（俺が怯むだと！？）」

千冬「それは私も聞きたいな？なぁ、志熊？」

志熊「悪いが死ねんのだ・・貴様等のせいでな・・・！」

そう言って走り去ってく志熊・・・

セシリア「お待ちなさい！」

ラウラ「待て、志熊！」

千冬「逃げられると思うな！」

そのころ一夏は・・・

箒「いぃちぃかぁぁぁぁ！！！」

鈴「一夏ぁ！死ねぇぇぇ！！！」

一夏「ぎゃーーー！！」

そして志熊と一夏が合流してから・・・・

一夏・志熊「「これは・・・面倒な事になった・・・・」」

二人が逃げ切れるかどうかはまた別のおはなし・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6923z/

外なる神とＩＳ

2011年12月29日09時47分発行